部は左に行き、一致してゐない。從つて表面的には國民政府の對日外交は成功した。日本は手も足も出ないやうな目に遭つてゐたのである。國民政府の最近の對日外交の目標はあらゆる國內的勢力を統制指揮して日本の軍部の工作に對して攻擊批難することであつた。これと同時に日本の內部における軍部に對立する勢力に働きかけてこの勢力を利用して、軍部の對支積極政策を包圍せんとしたのである。この政策は結果に於ては成功したかのごとき外觀を持つたのである。といふのは軍部の工作の一部については、民心に投ぜないものがあり、財界人を不安がらせ、リベラリズムの上に立つ日本ジャーナリズムの批難的批評の的となつてゐた。と同時に軍自體についても二・二六事件後の肅軍工作、軍擴豫算通過に伴ふ軍備整備の諸工作等、內部の問題に頭が向いてしまつてゐた。外國において無用の精力を費すことが出來ないといふことになり、自然の國內的必要からも日本の對支積極工作は變じて、現狀維持となつたのである。支那では、これを日本の不統制による退却と考へたのであつた。ここにも支那の錯誤があるのである。奉天事件の前夜だつて今日以上の不統制があつた。然して今日日本の主動勢力として

の軍部の立場は變つてゐないのみならず、質においても量においても增大してゐるのである。この誤つた認識は直ちに國民政府の日本輕視となり、同時に北支においては、今までの守勢の體制を變じて攻勢の體形をとるやうになつたのである。北支に續發するいろ〳〵な事件を見ると、策源地が南方にあり、目標が北支の中央化に集中されてゐたのである。

北支の中央化工作

北支の中央化、北支の原狀回復は、在來とても國民政府の不變の政策であつた。日本の壓力が强かつたから遠まきであり、內輪であつただけである。いつでも消極より積極に轉ずる用意を着々と進めて來てゐたのである。如何にして日本の勢力を食ひ止めようかといふところから、如何にして日本の勢力を驅逐するかといふことに變つて來てゐたのである。

在來の國民政府の北支政策の重點は、北支外廓の中央化、北支政權に對する兵力的重壓、北支政權內部の切り崩し、北支の民心の中央化、卽ち目下國民政府統治下において、强烈なる勢力となつてゐる抗日思想を基幹とする民族意識の北支普及といふことであつた。先日までの情

況からいへばこの計畫は九分通り成功してゐた。三年前の北支事件前後に比すれば雲泥の相違があつたのである。一時は北支政權と合流の可能性さへ傳へられた山西の閻錫山は、今日全く中央に釘づけされてしまつてゐた。綏遠の傅作義は禦侮抗日のナショナル・ヒーローとなつて中央勢力にがんじがらめに縛られてゐた。陝西また中央化され、陝西、山西、甘肅の山地に動いてゐた共產軍また鳴りを鎭めてゐた。山東の韓復榘また中央勢力を入れない約束を破つて、中央軍が稅警團と稱して青島附近に進出して來ても默認せざるを得ざる狀態であつた。

國民政府の內部に於ては韓復榘の他省移駐說が有力に動いてゐた。ただ日本との關係に考慮の必要があるからこれが實現しないだけで、この懸念さへなければとうの昔に韓復榘の首は飛んでゐたのである。それとてもただ時の問題として殘されてゐた。斯く見て來ると北支政權を繞る地域は九分通りは中央化してゐた。過去二年間の蔣介石の工作は、大成功であつたといはねばならぬ。共產軍が山西に這入つたといつては張學良を陝西に移し、中央軍を山西に入れ、綏遠事件を好機として綏遠に雄厚な中央軍を入れ、その上山西軍を同方面に押し出して山西、

綏遠の中央化を電光石火の間に完成した腕前は天晴れだつたといはねばならない。外廓地域の中央化が成功した上に、最近では中央軍の北支に對する重壓が頗る利いて居た。江蘇、河南の北境に集められた兵力を見ると、日本とでも一戰を辭せざる氣構であつた。國民政府の一部では、この雄厚なる兵力と、對日決戰の氣構が、日本軍部の北支積極工作を中絕せしめた原因だと考へてゐたのである。卽ち東は海州から西は西安までの隴海線の沿線に集められたものだけでも中央軍八ケ師、稅警團四萬、舊東北軍六ケ師、それに津浦鐵道、京漢沿線の兵力を加算すると、優に六十萬の軍隊があり、いづれも對日國防計畫によつて訓練配置され、鋒先は常に北支に向いてゐたのである、この兵力と氣構は、北支政權を組成する政治家に對しては大きな壓力となつて傳つて來た。この兵力と氣構を基點として、國民政府の北支政策が行はれてきたので、最近の國民政府の對北支政策は貫徹性をもつてゐたのである。

元來宋哲元は、日本の壓力と國民政府の壓力との中間において、双方のバランスの上に立つてゐた。このバランスが破るれば、宋哲元の身の上には必らず變化が生じなければならなかつ

たのである。宋哲元が故郷に逃避してなか〳〵出て來なかつたのは、この日支のバランスが現實に破れたためであらう。宋哲元の逃避にはいろ〳〵な政治的、人的、思想的な原因がこんがらがつてゐただらうけれども、この政治的、人的、思想的原因が發生した根源は、日本側から、蔣介石側からの壓力のバランスが破れたからだと見ていいのである。

また冀察政權内部の切り崩し、牽制も、過去三年に亙つて徐々と行はれ、今日においては冀察政權は殆んど中央の出店といつた形であつた。また、學生、青年等に對する國民黨の働きかけは、何時しか北支の内面を全く中央と一元的な抗日的色彩に塗りつぶしてしまつた。北支の學生運動、民衆運動は殆んど中央に指導の實權が握られてゐるといつてもよい狀態になつてしまつてゐた。

かういふ風に見て來ると、過去三年間の國民政府の北支工作は何れも成功であつたといつてよいし、當時上述の情態を立脚地として行はれた原狀回復工作は、可なり迫力を有しておつたものであるとみてよい。日本側からいふと可なり厄介なことになつて來てゐたのである。

最近北支に於ける事件

最近北支に續發した事件を通覽すると、殆んど全部國民政府の北支原狀回復の根本政策より出發したものばかりといつてもよいくらゐである。今この事件を個別的に見て見る。

宋哲元の逃避問題——具に見ると、宋哲元が北支政權の首腦として過去二年間存在し得たものは、彼の極端な政治的二重性格が許されたからである。一面は國民政府に屈從し、一面は日本勢力に迎合した。この中間的態度は、日本の壓力が強く國民政府が受身の立場にゐる時は、スポンヂ帶として蔣介石には宋哲元の必要があるのである。然し最近のやうに國民政府が積極的に北支の原狀回復、北支奪回を目標として工作を始めた時においては、宋哲元のこの二重性格は國民政府にとつては慊らないものとなつて來た。從つて宋哲元を變へるか、宋哲元の中央絶對服從を強要せなければならない。そこで北支中央化の第一歩として宋哲元の移駐問題が、蔣介石の胸中に去來してゐたのである。即ち宋哲元を河南の綏靖公署主任とし、蔣介石の股肱中の股肱、河南綏靖公署主任劉峙を持つて來て冀察政務委員會を更に弱體化し、實際的解消を

策してゐたのである。しかしこれを急速に實現することは、日本を激發する惧れがある。そこに蔣介石の政治的苦心があつたわけで、徐々に解體して行くといふやり方をとつてゐた。結局、宋哲元をして政治的逃避をせざるを得ないやうに仕向けてしまつたと見るべきであらう。

とも角宋哲元は、日本と國民政府との中間に挾つて、双方から責めつけられる問題を持つてゐた。津石鐵道の敷設契約は、冀察政權との間には話し合ひが出來た。國民政府は絶對反對である。東京天津間の連絡飛行は六月一日から實行されてゐる。南京政府は、六月一日附をもつて冀察に對しこれが禁止命令を出してゐる。蔣介石に對する貢物として宋哲元が努力した冀東の解消は一蹴されるといふ具合で宋哲元腐らざるを得ない。日本の壓力が強い時ならいいが、逆に北支に對する蔣介石の壓力が強くなつてゐた時世であつた、今までとは居心地が異つたのである。そこで宋哲元としては故郷樂陵に逃避して一息入れなければならない羽目に陷つたのである。この一息入れて居る間に宋哲元は岐路に立つてゐたのである。いよ〳〵蔣介石に絶對服從して日本に白い齒を向ける決心をつけるか、どうか、六月十五日宋哲元は樂陵におけるあ

る記念祭の席上で國民政府に忠誠を誓ひ最後まで抗日の最前線に立つ決意を披瀝し、大いに民衆の喝采を博したのである。

青島附近の稅警團不法行爲——元來山東には蔣介石の中央軍は入れないといふ約束が韓復榘と蔣介石との間に出來てゐた。であるが蔣介石の北支奪回工作が積極的になるにつれ、在來の韓復榘の態度は中央にとつては非常な邪魔になるのである。從つて最近においては韓復榘を厄介者視し牽制の手を延ばして來たのである。韓復榘の立場は頗る不安になつて來てゐた。この韓の弱味につけ込んで否應なしに海州に總本部を有する稅警團の山東入りを承諾させ、精鋭なる中央軍（黃杰の第二師、整理師團と稱し中央軍中にても最も精鋭なるもの）を稅警團と僞稱し、山東鐵道沿線に配置したのである。これはなぜその必要があつたかといへば冀察に對する武力的重壓を加ふるとともに、山東の中央化を一歩前進せしめ、韓復榘を强引に牽制する必要があつたからである。とともに重視しなければならないのは、蔣介石の國防計畫が山東沿線まで擴大したといふことになり、これは時期を見て天津、北平方面に延長擴大される性質のもの

であるといふ點である。國內的な必要といふよりも對北支、對日本に重點を置いた處置だといふ點である。

山東沿線に入つた中央軍は數は大して多くなく三千名ぐらゐであるが、必要以上の軍事施設をして居た。早晩山東沿線を京滬沿線同樣、日本人の自由旅行、居住を制限し、大規模の軍事準備をする準備工作とも思はれたのである。事變以前迄盛んに沿線居住の朝鮮人を壓迫して居た。沿線の城陽、即墨縣刺洪、その他の地點に續發してゐた朝鮮人壓迫事件はその一つの表現であると見ねばならぬ。今日我らが特に注意しなければならぬのは山東は、韓復榘の取締によつて排日の少ないところであつたのが、今年初めから抗日の空氣が山東全省に漲り、官公吏學生は勿論一般青年勞働者まで軍事教練を施し、排日思想の培養に努め、南方より排日的印刷物を盛んに持ち込み排日教育の徹底を期し、民衆を抗日戰線に引入れることに狂奔してきた。これは韓復榘が遂に獨自の政策を行ひ得ないことになり、南方國民黨の軍門に降つたことを意味するもので、山東の中央化が着着と進められて行つた證據である。この情勢は中央軍の山東

入りによつて益々盛んになつて行つたのである。

外人に對し土地賣却禁止令——五月廿一日冀察政權は、宋哲元の名で外國人に對する土地賣却禁止令を出した。これによると(一)冀察の管內にある土地所有者は期限までに新登記をなさねばならない(二)外國人に土地を賣却したものは死刑に處す。といふのである。元來國民政府には、嚴然たる一つのかくれた對日方針がある。即ち、苟くも支那に於て日本の權益となり、または權益の前提となるようなものは新たに成立することを阻止するといふ方針である。

宋哲元の禁止令は、この方針により國民政府の最高當局からの嚴命によつたものであらうと思はれる。この命令は土地の貸借及び、合併事業にまで大きな影響を與へたもので、北支における日支經濟合作は、中央の北支把握が嚴重となるにつれ、根本的困難に直面したことになるのである。北支の經濟開發は多くは合併によつて進められる方針であつたが、蔣介石の北支中央化が力をもつにつれて、國民黨人のイデオロギーが北支經濟界を支配し、抗日の意識が一般民衆に深まり、日本人と關係をもつものは賣國奴として一般の白眼、當局の監視を受くるとい

ふ南方の情勢が北支にも移行して來てゐたので、さなきだに困難な日本の經濟進出は、これによつて更に惡影響を受くることになつたのである。この命令によつて、天津縣政府は廿七日、日支青年共同耕作の聖農園の支那人地主古恩富を逮捕し投獄した。この農園は日本人の經營になるものである。さらに六月二日には支那の暴徒はこの農園を襲うて家屋三棟、日本人一人を傷け、日章旗を破毀した。

察北六縣中央化計畫——この察北六縣は土肥原、秦德純の協議によつて支那軍隊の入ることを禁止されてゐる地域であるが、最近頻りと便衣隊や、土匪的集團が出沒して策動してゐた。これ等は相當の資金と軍器を有し、主として地方農民を使嗾し、抗日思想を植ゑ込み、附近の內蒙古軍隊に働きかけて、兵變工作をなしつつあつたのである。當時中央黨部部員や、政府の青年官吏が續々として北支綏遠方面に北上してきたが、察北六縣に出沒する便衣隊の背後には、中央の策動あることは勿論明白なことであつた。卽ち平地泉にある中央第十三軍長湯恩伯が、これに對して總支配權を握り、同地方に舊部下を潛入せしめ、隨時に地方を擾亂して人民

を恐怖せしめ、內蒙工作の側面を牽制し、北支中央化を側面から促進せしめんとする工作であることが、漸次明瞭になつて來てゐたのである。六月六日綏遠において傅作義の統監の下に大仕掛の防空演習が擧行され中央軍の飛行機も參加して一大示威運動を行つたが、內蒙に對する威壓と、北支、察北等に對する重壓を示したもので、中央の北支北方からの働きかけも相當積極化して來たことを物語つてゐるのであつた。中央はあらゆる手足を動員して、北支の中央化に血眼になつてゐたのである。その他馮玉祥、石敬亭、鹿鍾麟、宋哲元、韓復榘等の舊長官が相つれて北支入りをなし、一方また國民政府の財政顧問であるステファニが北支に入つて、冀察最高首腦と會見したが如き、北支の財政、經濟、思想、政治、軍事の中央化にあらゆる戰略的、計畫的方策が進められてゐたのである。斯かる北支の情勢であつたので、一度び小刺戟があれば、北支に於ては日支激突の可能性が十分あつたのである。日本が日滿支間の摩擦なき理想鄕として精神を打ち込んだ北支は蔣政權の術策に弄せられていつしか火藥庫と變つてゐたのであつた。

三、戰爭以外に清算の路なき日支關係

北支を中心に切迫した日支關係

一國と一國とが相對し、相接觸して居る場合に兩國民とも錯覺に犯されることが多い。事變前の北支問題にも兩國民とも夥多の錯覺があつたやうに思ふ。この錯覺は、既成の概念をもつて金城鐵壁と思つたり、個人的なモラルによつて國家と國家との關係が規定され得ると思つりするところからも發足するやうに思ふ。こんなものを超越して、双方の國家には、宛も個人の場合における本能めいたものがある筈だ。これは内部の生産機構の狀態や、政治機構や、政治家の素材や、歴史や、國民の頭腦や、教育の結果や、等々のコンデイションを綜合して生れ出て來る一つの發動力、行動の源泉になり得る力があるであらう。これを國家の本能的力といつて置く。また、これ等の持つ各個の力を綜合すれば自然、國家の行動力、即ち國力といふも

のが割り出されて來る筈だ、この國力を驅使するものは國家の本能である、北支の問題は日支兩國の本能と國力との接觸面であつて、そんなものによつて作り出された新現象と見るべきものであらう。日本側から言へば資本家の野心や軍部の部分的行動だとのみ考へる譯には行かないことは勿論である。日支兩國の本能的欲望と國力とが、北支問題發生當時の狀態を今日依然として保つて居るが、支那はこの三年間に於て政府の統制力が強化した。そして國力が非常に躍進したやうに自信した。國民的欲望は一點に集中されて居るやうに見えた。外觀から見ると何だか恐わい見たいである。支那人が口喧嘩をする時は恐ろしい表情をして見せる。怒髮天を衝いて乾坤を震はせんばかりであるが、いざ毆り合ひとなると大したことではない。叩き合はずして勝を占めんとする戰法である。國定忠治はニコツと笑つて人を斬つたといふ。

日本は表面甚だ不統制に見える、事實、政治、外交、社會、凡ゆる分野にそんなことは日本にない。内部に多くの意欲があつて、それが勝手な方角に向いて居た。支那から見ると日本の國力が弱つた證據の樣に見えたのである。リベラリズム陣營とナショナリズム陣營とが深刻に

相剋して居るやうに見える。だがこれは冷靜に考へて見ると、前に言つた內部の諸條件が大きく變りつつあることを表現した表面の現象であつて、次の時代に適應せんとする生みの惱みであるやうである。國力が弱つたためではないのである。

で、日本では支那を過大評價した。その結果日本に於いては冀東の解消論も起り、支那では『北支の政治解決がすべての先決條件だ』といふ積極論になつて、日本の國交調整案や經濟提携に對し木で鼻をくくる態度に出たのである。著しく侮日的感情を濃厚にした。支那が日本を見るやうに、ほんとうに日本の國力が弱つたものならば、また日本が支那を見るやうにほんとうに支那が強くなつたものならば、北支の問題は自然解決が出來るのである。戰爭に至らずして解決が出來る筈だ。然るに實際には出來ないといふのは、これ等の見方が錯覺であつて、血の出るやうな現實は、別な基礎條件の上に乘つて居る結果に他ならないのであつた。

本年初頭日支問題の焦點になつて居た冀東政權に關しても、日本ではいろ〳〵の考へ方があつた。解消論の根據になつて居たものは、冀東が今日日支關係惡化の病源だと思ひ込んで居た

人達である。國民政府は勿論これを高唱して居た。日支國交の癌だといつて居たのである。これ等の人は今日の日支關係を割合ひ簡單に見て居たのである、北支問題さへ支那の滿足するやうに解決すれば日支關係が好轉するだらうと思ひ込んで居た。これは危險なスペキュレーションだとせねばならない。そんなに易しい關係ではなかつたのである。それは一時は何とか緩和したであらう。だがこの緩和は更らに、深刻なる惡化の階段となるのである。日支の根本關係がどうなつて居るかといふことを、冷靜に考へて見るがいい。支那側に言はせると武力によつて有無を言はせず決定されたバランスだと思ひ込んで居る。これは日本が何と言はうが言ふまいが、支那側ではさう考へて居る、嚴然たる現實である。滿洲問題といふものは北支問題がいかに解決されても最後まで殘るものであり、北支と相聯關する問題である。從つて北支問題が支那の欲する通りに解決されても支那關係が好轉するといふ期待はかけられない。癌は殘つて居るのだ。北支で爭つて居る間は双方に餘裕がある。滿洲問題を挾んで爭ふ段になると戰爭をかけなければならない。氣合は切つぱつまつて來るのである。今日の日支兩國の國情では日

支間の根本問題を確然と解決することは不可能であると思ふ。いかに焦つても、考へても、いざ現實の問題になると行き詰つてしまふのである。從つて吾人の見解によれば戰爭手段を双方が欲せぬならば寧ろ北支で右に行つたり左に行つたりして小ぜり合ひをして居るといふことが日支双方のためには寧ろ當然の成行きで、政治、外交の力では如何ともなし難き因緣であらうと思ふ。この如何ともなし難きことを確然と決めやうとするところに戰爭の原因があるので、いろ〳〵な無理が發生するのではあるまいか。今日の事變は、どこから見ても蔣政權が北支奪回を焦つたところにその直接原因があるのである。

戰爭は必然

日本では、日支關係に關して一種の不安感をもつて居る。この不安感が、不幸感になつてゐたのである。そしてこのまゝではいけないといふ焦燥感に陷つて居たのである。從つて何か國交調整のために手が打たれなければ大變だといふところで、容觀情勢や、結果を考へずに思ひつきの手が打たれたのである。滿洲事變後、今回の事件までの間はその連續であつた。その度

毎にまづい結果となつて居たのである。そこになると支那側は一定の目標をもち主張をもつて居る。寧ろ餘裕があるので成功した。

今日日本が納得の行くやうな調整案で日支關係が整調出來ると考へるのが大きな間違である。例へば對支三原則にしろ、昨秋行はれた南京交渉に出された國交調整案にしろ、佐藤外相の言ふ互惠平等にしろ、日本側から考へればちつとも無理はない、當然のことであつて、支那が聽かないのがどうかして居るのである。であるけれども支那の國情から考へれば出來ない相談であつた。外交は獨り相撲でなくて相手がある。相手には相手の術があり力量があり癖がある。相手を思ふやうに牛耳る爲めには相手に優越する術と力量がなくてはならない。

近い話が佐藤外相の互惠平等である。佐藤外相の本年三月議會における對支アナウンスに前後して國民政府の王寵惠も、互惠平等によつて日支の關係を調整すべきことを力說した。表面的に見ると双方の意見は期せずして一致したことになつたのである。であるが現實には、これを徹底して行けば戰爭によつて勝負を決めねばならぬといふところまで行くのである。といふ

のは佐藤の言ふ互惠平等も王寵惠の言ふそれもヴオキアブラリーは同じであるけれども、その内容は千里の隔りがある。佐藤が言ふのは滿洲事變後の新事態をそのまゝ据ゑ置いて今後の關係に互惠平等の立場をとらうといふのだし、王寵惠は先づ今日の不平等關係を訂正して、端的に言へば滿洲國を解消して、平等の立場に立つて新關係を結ばうといふのである。日本の國情からして、滿洲事變以前の關係に立戻ることが出來るかどうか夢想だに出來ないことではないか。また支那の國情から見て滿洲國をそのまゝにして日本と新關係を結ぶことが出來るかどうか、何れも出來ない相談である。どちらか主張を押し通さうとすれば實力で押し通すよりほかないのである。その中間において妥協の路は絶對にないやうに思ふ。從つて將來は知らず、當時の情勢から言へば、外交的な日支間の全面的な調整などは思ひもよらないことであつた。清算しやうとすれば只、武力によつて解決するよりほかなかつたのである。

そこで再び北支問題を考へる。南京側では北支問題を解決しなければ日本の提唱する經濟提携は出來ないと言つてゐたのである。日本側から言へば馬鹿にして居るといふ氣持がするし、

支那側から考へれば、政治關係はこのままにして經濟關係ばかり作らうといふのは蟲がよすぎると考へたのは無理がない。兩方の考へ方が對蹠的になる。それは基本の關係が對蹠的になつて居るからである。そこで當時の日支關係や兩國の國情を具さに見ると、經濟提携など提唱したといふことが無駄なことだといふことになるのである。日本で如何に納得しても支那に受け容れられぬ事情が横つてゐるのみならず、日本のそんな態度は却つて乘ぜられるといふ現實があれば、そんなことはしないが一番よかつたのである。

かう言へば、何だかデスペレートな氣持であるやうに考へられる。大いに經濟提携をすることが兩國の幸福であり、日本側から見れば、國力增大の緊要事であつたに違ない。出來ればこれに越したことはないので、大いに努力せなければならなかつたのである。然し兩國の國内情勢が變らざる限り出來ないことであるとすれば放つて置くよりほかないのである。

日支の經濟關係は、政治關係の良からざるにかかはらず、略〻經濟の原則に乘つて居たやうである。支那に購買力があり、支那が切實に必要とし、日本が最も好條件に與へ得る品物に就い

ては完全に經濟提携が出來て居るのである。安くて、良いもので、支那が必要とするものはどん〳〵と賣れて居るのである。經濟提携は日本自體の金融産業の狀態と、支那のそれとの間にバランスが決定さるゝもので、政治關係の良否はこの原則を動かすことは出來ない。

事變前英國は支那にどん〳〵と進出してゐた。日本は英國の進出力に比して稍停滯の形であつた。日本は大變これに氣を揉んで居たが、日本が英國ほどに活潑な活動が出來ないのは、日支の政治關係が良くなく、支那は殊更に英國と接近し、日本を牽制せんとするものであると考へる風があつた。然しまた英支の關係を具に見ると、當然さうならねばならないやうになつて居たのである。今日國民政府が何を切實に必要としてゐたかといへば、貨幣制度維持のための金融上の援助と、建設材料及び資本であつた。この國民政府の必要を最も好條件に滿し得るものは英國よりほかにないのである。日本は自國内の生産機構擴大に要する資金、滿洲國建設の材料供給等によつて、支那に供給する餘力はない。北支にさへ資金の流出することを防止して居る實情である。北支への經濟進出が思ふやうに進まないのは、北支の狀態にも一の原因はあ

るけれども、自國の實力の問題であつたのだ。こんな現狀で、たとへ北支問題が解決されたとしても、日支の經濟關係が急速に進展する筈はないのである。當時以上の進出は不可能であらうと思はれる。當時の日支關係がどうにもならなかつたとすれば、躍起となつて國交調整を焦る必要はなかつた。時機の到來するのを待つべきであつたらうと思ふ、不必要な不安感や、不幸感が却つて兩國關係を刺戟することゝなつたのである。そこで日本の北支、中支における姿勢は著しく現狀維持的となつたのである、この日本の現狀維持的姿勢を、支那が正しく解釋し、これに適應する態度をとれば、日支の激突は起らずして濟んだ筈である、であるが支那は誤つた。それには前にも言つたやうに綏遠事件の成功があり、西安事件があつて支那は自國の力を過大視して思ひ上つてしまつて居た。日本の現狀維持姿勢をもつて國力低下による萎縮と解釋したのである。この機に乘じて北支の原狀回復へと足並が揃へられたのである。度重なる北支における排日事件はこの政策の上に發生した。相戰ふ以外に清算の路はなきに至つてゐた。

第六章　遂に激發

一、北支事變はかくして起つた

頻々たる不法行爲の發生

北支における事態は今日進行中であるので、今後どういふ風に進展して行くか、豫測を許さないが、日本としては用兵の目的があくまで自衞的であり、北支の明朗化を目標としてゐるから、この目的が達せられるまでは今回の事件は進展を繼續すると思はれる。

今回事件の發端になつた蘆溝橋における廿九軍の不法發砲事件のやうな事件は、在來も幾度も繰返されてゐる。即ち昨年の正月起つた朝陽門事件、これは北平の朝陽門内において我が駐屯軍の鈴木大尉以下七名の乘車せる自動車に對し發砲せる事件である。又昨年の五月には天津

東站において我が軍用列車の爆破をはかり、七月の末には第一回の豐台事件が起つてゐる。又九月の十八日には第二回の豐台事件が再發するなど、廿九軍の我が北支駐屯軍に對する不法行爲は頻々として起つたのである。

これ等の事件はその都度局地の小問題として出先當局の間において地方解決を見てゐる。然るにこれ等と事件の性質は全く同じでありながら、何故今回の蘆溝橋事件が擴大惡化し、日支間の大衝突を惹起しなければならない狀態に立至つたか。この點が今回の北支事變に對して十分な檢討を加へられなければならない一點と思ふ。

かくの如く一年前なら當然地方的、局地的平和解決が出來るべき事件が一年後の今日においては、必然的に今回の北支事變のやうに擴大する。これは北支の情勢が一年前に比して非常に變つてゐるといふこと、即ち北支にさうならねばならぬ素地が出來てゐたからだ。端的に說明すると北支の狀態を裏になり、表になり決定するところの二大ファクターたる日本及び南京の狀態が變つて來てゐるからである。

今後に殘る協定破棄問題

二年前二回に亙る北支事件が起つた。これは昭和八年の停戰協定前後に北支に成立した何應欽、黃郛を中心とする北平政務委員會が結局において反滿抗日の策源本部となり、北支一帶をそのままに放置するにおいては、滿洲國の治安維持にも支障を生じ、日本にも多大の不安を與ふるので、この狀態を根本的に改良するために、前後二回に亙る北支事件が發生したのであつた。その結果梅津・何應欽の協定となり、河北、察哈爾の兩省から南京政治機關、中央軍、憲兵、藍衣社、C・C團、國民黨部等一切の反滿抗日機關の撤退を行はしめた。(梅津・何應欽協定は北支の特殊性を構成する諸協定のところにあるから省略)

この協定により中央軍は河北、察哈爾の兩省には一切進駐出來ないことになつてゐる。然るに今回の蘆溝橋事件以來の推移を見るに中央軍はこの協定を破つて河北に進入してゐるのである。從つてこの協定破棄の問題が殘された大きな問題であつた。中央軍との衝突もこれあるがためである。

かくして以上の徑路を辿つて北支政權は何應欽・黃郛等の政權につづいて北平に生れたのである。この新政權の首腦である宋哲元はそれまでは察哈爾に不遇をかこつてゐたのである。熱河戰に參加したりして始めはすこぶる排日的であつたが、後で前非を悔いたのか、日本側に取入るためのジエスチユアーであつたのか、反蔣的色彩を濃厚にした。そのために北支政權の首腦として迎へられたのである。

北支の特殊性・蹂躙された諸協定

もと〳〵宋哲元勢力が北支政權の主體となり得たのは、北支の日滿支三國關係における特殊性によるものである。その特殊性とは北支が日滿支間の緩衝地帶であり、更らに北支を以て滿洲事變以來の破局的な日滿支關係を親善へ、提携へ誘導するところの地帶でなければならぬことである。而して日本側から見れば、こゝは滿洲國の安定と發展の防衞帶でなければならない。而して滿洲事變以來の北支における事態の推移よりして、この地の支配的勢力が、反日滿性をいささかでも持つものは存在し得ないわけである。何應欽、黃郛の北支政權が崩壞せねば

ならなかつたのは、これがためである。ここに宋哲元の北支政權が誕生した理由がある。つまり北支の特殊性の上に彼の政權が立ち、日滿との親善關係を彼が樹立せんとする熱意をもつたからこそ、彼が新しき北支政權を樹立し、その首腦たり得たわけである。從つて一番根本的なものは北支の特殊性である。この特殊性は左記の如き歷史を經過し、左記の諸條約、諸協定によつて法的に構成され、保障され、關係國から承認されてゐるわけなのである。これが今や蹂躙されてゐるところに北支事變の發生の一原因があるのである。

以下これが法的根據となる北支諸協定を解說する。

塘沽停戰協定　滿洲事變の繼續である皇軍の長城突破戰により、日本軍は昭和八年五月張學良の率ゐる舊東北軍、宋哲元の率ゐる第廿九軍等支那軍を擊破して北平、天津に迫つた。これにより支那軍は停戰を申込み、河北省塘沽で協定されたのがこの塘沽停戰協定である。即ち昭和八年五月卅一日關東軍代表岡村寧次少將と國民政府軍事委員會北平軍事分會委員長代理何應欽代理熊斌はこの協定において

(一)延慶、昌平、高麗營、順義、通州、香河、寶抵、林亭鎮、寧河、蘆台を結ぶ線と長城線との中間地區を非武裝地帶とすること、(二)支那軍は同線を越えて前進せず、また一切攪亂行爲をせぬことを協定した。この地域は、昭和十年十一月廿五日殷汝耕により『冀東防共自治委員會』として生誕して獨立、日本、滿洲兩國と特殊密接な關係ある政府となつてゐた。これにより北支河北省の一部が完全に日滿兩國の特殊性を發揮してゐるのであた。支那側はこの明白な特殊協定を無視して、北支原狀復歸を口にして不法にも冀東政權の解消をせまり、更に塘沽停戰協定の取消を要求してゐたのである。

梅津・何應欽協定　昭和十年六月十日成立し、この協定は

(イ)河北省主席于學忠、憲兵第三團長蔣孝先兩人の罷免(ロ)憲兵第三團、北平軍事分會、政治訓練所の北支撤退(ハ)河北省黨部の撤退(ニ)于學忠軍、中央軍の河北省撤退(ホ)排日祕密機關の絶滅(ヘ)排日の取締命令

以上の取極めで當時の梅津駐屯軍司令官と何應欽軍事分會委員長代理との間に調印された。

この協定の締結されるにいたつた原因は昭和十年五月三日、天津日本租界の二名の親日支那人新聞社長が藍衣社員により暗殺され、その他日本憲兵が狙撃されたり、惡質な排日事件が繰返されたので、この機會に徹底的に北支から排日を一掃するために結んだもので、この協定およびその保障條項によつて河北省内には中央軍は勿論、黨部、藍衣社、祕密機關その他一切の排日機關は入れぬことになつてゐる。この協定は支那側により無視され、殊に中央軍の北上は重大なる結果を來したのである。

土肥原・秦德純協定　昭和九年十月張北事件等の支那側の日本軍侮辱、國境侵犯により昭和十年六月十八日、當時の土肥原關東軍特務機關長と秦德純察哈爾省主席代理との間に結ばれたもので

(イ)滿洲國國境附近より宋哲元軍の撤退(ロ)排日機關の解散

が取極められた。これは停戰協定地區の察哈爾省内への擴張で、これにより停戰協定區域線たる河北省昌平と察哈爾省の赤城、獨石口を結ぶ線と長城線との區域が特殊地域となつたもの

で、この區域がいはゆる察北六縣といはれる。

通車・通郵協定　北平・奉天間の通車協定は昭和九年六月成立、同年七月一日から實施されてをり、通郵協定は昭和九年十二月成立、十年一月より實施された。今回の北寧鐵路の支那側による一方的運行停止はこの協定違反であり、しば〳〵行はれる通郵の不圓滑と信書開封、不足料の徴收、これまた協定違反である。

日支電信・電話協定・日支航空協定　天津、東京、天津、北平、滿洲、大連間の連絡航空以上は最近の北支特殊性を示す諸協定であるが、滿洲事變前の協定は左のとほりになつてゐる。

北清事變に關する最終議定書　一、團匪事件と大公使館區域、義和團事件の善後處理に關する一九〇一年(明治卅四年)『北清事變に關する最終議定書』第七條による日本はじめ各國政府は北平に大、公使館、警察權を持ち、支那人の居住を認めてゐない。

一、同議定書第八條により支那は大沽砲臺と北寧鐵路沿線の諸砲臺の撤廢を認めてゐる。

一、日本はじめ各國政府は北平大、公使館城および北平、山海關、北寧沿線に駐兵權を有する。

る。

天津還附日清交換公文　一九〇二年(明治卅五年)、これは北支の特殊性を形成する數多の規定を包藏してゐる。

一、支那軍隊排除條項　支那軍は天津駐屯外國軍隊の駐屯地域より廿支里外(日本里約三里半)に駐留する

二、駐屯軍の彈壓治罪權　北清事變に關する最終議定書にある北寧沿線の外國軍隊の駐兵權を認め、外國軍隊の駐屯地域內における彈壓治罪權を認め、鐵道線路、電信線、外國人およびその所有物に對し、支那人の加へた犯罪に對する一切の處分權は當該外國軍側にある旨規定してゐるが、これを具體的に擴充したもので、外國軍隊に使用される支那人の犯罪處分は當該外國軍側にあり、北寧沿線二マイルの距離に關する裁判權は管轄外國軍側にあるとしてゐる。

三、日本軍演習自由の權　日本公使より清國全權宛公文中において『：外國軍は操練をなし射擊及び野外演習を行ふこと自由たるべく唯戰鬪射擊の際には單にその通告を與へ可申候』

とあり、北清事變最終議定書による駐兵權の施行範圍附近一帶における日本軍の演習は當然の權利なのである。今度の事件發生の蘆溝橋附近は駐兵權ある豐臺の附近に該當するので、當然支那側から文句はつけられぬところである。

宋政權の實體廿九軍の軍權

元來宋哲元は支那式のヌーボで、卒伍の間に身を起して、つひに今日の地位を得たものである。年五十三、山東省樂陵縣の生れである。今日南京政府の內部において最も抗日意識のはげしい馮玉祥とは切つても切れぬ仲である。馮玉祥が第十六混成旅團長時代にその部下となつた。一九二四年、第二奉直戰のときには馮玉祥の第十一師長であつた。第十一師は、馮玉祥子飼の師團で、馮はこれを宋哲元に讓つたところから見ても、如何に馮が宋を信任してゐたかといふことが判る。一九二七年馮が蔣介石の國民革命軍に參加したとき、宋哲元は馮麾下の第四方面軍總指揮となつて陝西省主席をかね、ついで山東省政府委員となつた。北伐革命が完成し、今度は蔣介石と馮玉祥、閻錫山の聯合軍が河內で戰つたときは、彼は一時馮玉祥軍の全指揮を

したこともあつた。馮が沒落すると張學良に救はれて東北第三軍長となつた。この第三軍長こそ今日の廿九軍である。それ以來すでに七年間、彼はこの軍長をやつて來てゐる。熱河戰には長城線によつて我が軍に抵抗し、中々の反日家であつたが、心機一轉して、前に書いたやうに親日のジエスチユアーをして、つひに北支の主となつたのである。

この宋哲元が北支政權を樹立し、維持して行く力の基礎が廿九軍であり、廿九軍の軍權こそ宋權力の同義語であるわけである。北支政權、卽ち冀察政權は廿九軍を背柱としてゐる。冀察河北、察爾哈兩省の政治軍事の權は廿九軍幹部の握るところである。宋哲元は冀察政務委員長であり、同地方の軍政並びに軍事の最高支配權をもつ冀察綏靖公署主任であるとともに廿九軍軍長なのである。宋の下に五人の幹部がゐる。今度の事件の發端をなした卅七師長たる馮治安は河北省長である。又郎坊事件を起した部隊の最高指揮者たる卅八師長は張自忠で彼は天津市長である。北平市長秦德純は宋哲元の智囊として知られ廿九軍の副軍長である。百四十三師長の劉汝明は察哈爾の省長である。別に主要な政治上の地位をしめなかつた百卅二師長趙登禹が

ある。かく見るとき廿九軍を構成する冊七、冊八、百冊二、百四十三の四ケ師の師長並に軍長副軍長は、何れも河北、察哈爾二省二市の政治、軍事の權力者なのである。而して冀察政務委員會委員中には宋哲元勢力の御聲がかりが多數を占めてゐるのである。從つて冀察政權の實體は廿九軍の軍權であり、宋勢力一色の政權であるといふことが出來るわけなのである。これが宋の親日のジエスチユアーの背景になつて、河北、察哈爾の主人公に宋を祭りあげてゐたのである。

冀察の中央化、抗日分子跳梁

かくして日本が宋政權成立に助力した所以は、北支を日滿支三國間の緩衝地帶とし、平和の理想鄉を實現するためであつた。從つて北支政權に期待するところは北支より反滿抗日の風潮を除去すること、北支の政治的安定を計ること、日本の合理的經濟進出に對して協力することと資源の共同開發を計ること等であつた。この理想を實現する實力をもち、北支居留民に對して十分の保護を與へ得る政權であるといふことであつた。成立當初は日本の壓力も生々しかつた

ので、多少の期待が宋哲元の上にかけられたが、その後の情勢は日本側の期待とは逆行するものばかりであつた。成立以來わづかに二年にして、北支政權は全く中央の出店と化し、廿九軍は蔣介石の中央軍と殆ど代りなき反滿抗日意識の横溢する軍隊と化し終つたのである。

そこで一年前に起つた朝陽事件や第一回、第二回豐臺事件などを回想してみると、その背後關係が今回の蘆溝橋事件の如く深刻惡性でなかつた。廿九軍特獨の末梢的侮日抗日事件として取扱はれ得たのである。從つて事件は局地、現地の官憲の間に易々として解決され得たのである。然るに上述の如く、今日においては北支政權は中央化し、廿九軍は蔣介石の抗日イデオロギーに把握されてゐる。ことが今回の蘆溝橋事件の末梢的、局地的な事件として解決することが不可能で、根本の原因に遡つて解決するといふ擴大性があつたわけである。

然らば蘆溝橋事件直前の北支の狀態はどうであつたか。

第一、北支政權の內部の狀態はどうなつてゐたか。過去二年間の蔣介石の間斷なき切り崩し工作によつて殆ど南京の抗日思想を中心とする政治思想に左右されてゐた。一部には猛烈な抗

日意識に燃えて抗日政策の實現を企圖してゐた人物もゐた。從つて日本の目的とする北支における經濟合作や資源の共同開發や交通網の改善などは、日本が如何にやつきとなつても進捗しない。所謂北支工作は全く行き惱みの狀態になつてゐたのであり、北支は次第に反滿抗日の策源地としての面貌を露骨に現して來たのである。これといふのも北支政權の中に南京政府に糸を引かれた數多の抗日分子が存在してゐたからである。ここに蘆溝橋事件の擴大性の一つがあつたのである。

第二は北支政權が右の如き抗日分子の跳梁にまかせられ、不統制、弱力であつたために二年來共產黨の活動がかなり自由に行はれた。この共產運動は十年來の支那共產黨の運動と全く面目を異にし、その目標とするところは抗日戰線の擴大强化一本槍であつた。從つて日本政策を阻害する一つの大きな勢力であつた。一昨年八月モスクワにおける第七回コミンテルンの大會は海外における共產黨指導のタクテツクを變更した支那においても在來の蔣政權打倒の目標をかへて、抗日戰線强化のためには如何なる勢力團體とも共同戰線をはるといふことになつたの

である。從つて支那共產黨の活動の場面は南方蔣介石の膝元から北支に移つて來たのである。北支は全く赤の溫床となつた觀があつた。有力な共產黨指導者は續々と北支にのり込み、モスクワからは多額の資金をもつた宣傳指導機關が天津に移されたのであつた。これらの共產黨は或ひは學生に働きかけ、或ひは青年を抱き込み、廿九軍の下層幹部を赤化し、各種の抗日團體と協力して專ら日本の工作を妨害することに狂奔したのであつた。北支大學生の二割までは共產黨の把握下にあるといふ有樣であつた。

第三は北支政權が右の通りであり、又共產黨の活動が右の通り自由であるので、各種の抗日團體が大ピラに雨後の筍の如く、北支一帶に簇生したのである。一九三五年の夏から今日まで六十八の抗日團體が成立し、又これらの運動に對するシンパ團體を加ふるときは、北支のあらゆる團體は殆ど抗日運動に關係してゐると見ていい。これらの團體は南京政權下の抗日團體の出店であり常に一心同體の活動を續けてゐた。これらの團體が廿九軍に對し猛然と働きかけてゐたのである。一つは共產黨の煽動を受け、一つはこれら抗日團體の働きかけによつて、廿

九軍の中堅下級兵卒はまたたく間に猛烈な抗日意識を有する集團と化し去つたのである。

かくの如く北支のあらゆる實勢力はことごとく南京のイデオロギーに左右され、日本の理想はことゞ〳〵く蹂躙されてゐた實情にあつた。

日本の底流の對支態度

昨年末の綏遠事件及び西安事件後から北支に起つたいろ〳〵な事件を檢討して見ると、たとへば青島附近に進出して來た稅警團の邦人不法壓迫事件、天津附近聖農園の襲擊事件、外國人に土地貸借賣買禁止條令、察北六縣の便衣隊の策動、大連沖邦人漁船不法射擊事件等を見ると、ことごとく南京政府の露骨なる中央化工作である。そして南京政府ののしかかつて來る力と、日本の現狀維持的政策の摩擦面に發生してゐるのである。南京政府が攻勢で、日本が守勢である程度と形式の差こそあれその性質は滿洲に發生した諸事件と一脈相通ずるものがあつた。日本の既得のある狀態に對して、侵害する性質のものであつた。ここにおいて俄然として北支がテンダー・ボックスとしての危險性を包藏し始めたのである。かくの如く北支をテンダ

ー・ボックス化したのは南京政府の日本の表面の分裂的諸現象に對する一種の錯覺と、自己の力に對する過信によつて、日本に積極的發動力がなくなつてゐると見て、露骨な原狀回復をあせつたからである。この最近における北支の事件に全部が日本が受身であつたといふことは、日本にどんな影響を及ぼしたかといへば、日本の底流に横はるものを刺戟し、日本の底流にはいつとはなしに反擊的姿勢が出來てゐたのである。自衞本能が強く動いてゐたのである。これは日本の表面現象ばかり見てゐるものには、少しも判らない空氣であつた。我々が南京の政治家に日本の底流に注意せよと警告したのはそれである。チョツとした刺戟で日本は一致結束して立あがる下地が出來てゐたのである。滿洲事變以後今日に至るまでの日本の底流の對支態度を見ると、初期には『何とかして』支那との國交回復を計りたいとの熱望を持つてゐた。中ごろにはいろ〳〵とこれが具體化工作の失敗によつて『何とも出來ない』との失望の空氣であつた。つぎには『これではいけない』と一方において支那の再認識、一方には日本の內部情勢に對する反省が湧いて來たのである。その間に支那の對日態度は益々硬化し、北支においては北

支政權すら南京と一緒になつて、暴戾な態度を表示するといふことになつて、日本の底流の空氣は、濃度の差こそあれ、滿洲事件前夜の强硬なものとなりつつあつたのである。南京の政治家は勿論これを知らない。南京の政治家は大概日本の新聞、雜誌を通じて日本を見てゐる。その頃の日本の新聞や雜誌や政治家の言論には、凡そこの底流の空氣と逆なものが出てゐた。

南京の政治家は彼等の耳に聞えよいセンチメンタリズムや、理想派や、リベラリストの觀念の遊戯や、感情論や、非現實的な道義論をもつて日本の大勢を判斷する風があつた。支那に限らず何處の國民も自己に都合のよい議論を聞いて相手國の大勢と考へたがる風がある。であるけれども、今日の如く政治組織が複雜になり經濟組織が高度に達し、社會が進化してゐる國家においては、大勢が決するのは、これらの組織が持つてゐる客觀性に外ならぬのだ。南京政府の政治家は、これらの誤算に基いて日本を輕視し、北支の原狀回復をあせり、そして終にテンダー・ボックスに火をつけたといふことになるのである。日本の底流に横たはつてゐた南京の思ひあがつた仕草に對する反擊的な感情が、蘆溝橋の銃聲に一度に爆發したのが今回の北支事

變の擴大して行く原因である。

二、渾沌北支に黎明來ん

支那事件は今尙ほ進行中であり、落着く先はわからない。であるが、僕等の今日最も知りたいことは、日本はこれをどう解決せんとするのであるかといふことと、北支はどうなるかといふことであると思ふ。前者は帝國の方針が已に決定して居るのであるから略々推察が出來るが、後者は判らない。誰れ一人として正確な判斷は出來ないと思ふ。といふのは、これは獨り相撲ではないのである。相手があり、形勢の進展がある。從つて相手の出やうや、强弱によつてそれ〴〵の容相を變化して來るのである。

然らば事件は如何に進展するか。これを見るには、北支に對する日本の理想と本能的要求とを明確に知る必要があるのである。卽ち二年前の北支事件を回想すると思ひ當るものがある。熱河省に引續いて塘沽協定が締結された。この協定の基礎は、滿洲國の自衞のためである。然

るにその後に於ける停戰地區、及び、北平、天津に於ける情態はどうであつたかと見れば、反滿抗日運動の策源地となつた。中央の機關である北平政務委員會、軍事委員會分會、國民黨黨部、藍衣社、憲兵第三團、中央軍等が、この運動の策謀本部であることが證據だつたのであつた。そこで、北支の中央化を排除して、反滿抗日の策動に止めを刺し、日滿支三國の緩衝地帶として平和の理想鄕を建設するといふ目標のもとに、二囘に亙つて北支事件が發生したのである。北支の中央化は卽ち反滿抗日運動の地盤となることは自然である。そこで北支から中央の勢力を排除した。日本の壓力が十分で、中央が北支から手を引いた當座は、反滿抗日運動も跡を絕ち、北支政權も政治的安定を得、日本の經濟的進出の希望も見へ、北支資源の共同開發も順調に行きそうに見へた。然しそれも束の間で執拗な南京政權は直ちに再び北支の中央化に着手したのである。これは南京政府の身になつて見れば當然のことであらうけれども、決して現實に卽したいい政策ではなかつた。滿洲の權益囘收を策して滿洲を失なひ熱河を失つたと同樣に北支の中央化を圖つて北支を失ふといふ結果になるのである。個人の生活でもそうである。

理想と自己の力量との調和のとれないものは必らず失敗する。南京政府の北支政策は此の點に大きな錯誤があるのである。南京政府の過去二年間の對北支政策を見ると北支において日本の壓力を感じて居る間は、專ら北支の外廓地帶の中央化に向つて勢力が集中された。昨年初頭共産軍が山西に迫るやこれを機會に大兵力を送り、陝西、山西、綏遠の中央化を策して成功し、綏遠事件によつていよ〳〵これを强固にし、隴海線一帶に半永久的陣地を築き十數ケ師團を同鐵道沿線に集中し、山東の韓復榘を威壓し、北支を實力的に包圍しその重壓のもとに北支政權內部の切り崩し、中央化に全力を傾けたのである。

南京政府の對北支政策は表面まことに巧妙であり成功であるかの如く見へ北支政權は緩衝的政權としての機能を失なつてしまひ、日本の北支に對する要望や理想の實現は可能性がなくなつてしまつたのである。そうなると二年前日本が宋哲元を主班とする北支政權の出現を要望したのは、結果に於いて無駄であつたといふことになり、現在の北支政權の存在理由を日本は認められないといふことになるのである。この點が明かになると日本の自衞的行動の發展する方

向が決定されると思ふ。

從つて今度の事件は此處にキイがあるやうである。北支に於いて、日、滿、支三國の緩衝政權としての機能を發揮し、北支の平和維持の實力と誠意ある新政權が成立するか、さもなくば在來の北支政權が形式、精神を根本的に變へて存續するかの二つよりほかに行き途はないやうに見へる。この新らしき精神の上に立つ北支政權の出現を南京政府が阻止する手段をとつた時に事件は第二段に入り擴大深刻化して日支間の全面的な衝突は避けられないことになつたのである。北支の特殊性を痛感し眞に日本と提携し北支の事態を收拾し得る人物は日本の決意如何によつて容易に出現し得るだらうと思ふ。これに對して日本は絶對の支持を與ふればよいのだ。從てこの政權に反對するものは北支の平和維持に反對するものであるから日本の實力をもつてしてこれを排除するといふことになり、廿九軍の歸趨を問ふて擊滅すべきは擊滅するといふことになるのであるまいか。

北支政權內部の實狀を見ると、必らずしも南京と結托し、南京に迎合して、抗日の尻馬に乘

つて自滅を圖つてゐるもの許りではなかつた。心あるものは現實に卽して日本と協力し、北支の平和を維持せんことを欲して居るものがあつたのである。

在來の北支に於いてこの種の識見と主張をもつ人物が表面に成長し得なかつたのは、北支政權の內部に於ては、日本の壓力が南京の壓力より遙かに弱かつたからである。且又北支の土臺が南京のイデオロギーに次第に染まつて來た爲である。南京の中央化排擊に日本が益々本腰を入れるといふことになるとこれ等の達眼の士の勢力は自然と增大して彼等が北支の主役となり得るのである。從つて北支における壓力を增大するといふことが先決問題となるのである。

第七章　苦惱する蔣介石

一、上海攻撃あの手この手

主戰派と現地解決派

蔣介石の『たが』がゆるんだのか、現實の事態が蔣介石の智慧の裏をかいたのか、蔣介石すつかりスランプに陷つた形である。然し過去の經驗からするとこれは油斷が出來ない。外からは蔣介石政權はもう駄目だと幾度思はれたか知れない。危機のドン底まで持つて來て急轉換して自己政權强化の大芝居を演じて居るのである。恰も飛行機の錐もみといふものであらう。そんな藝當を兩三回やつて見せたことがあるのである。北支の戰爭では大體蔣介石が何時どんな狀態になつて錐もみして浮び上らうとして居たか略想像がついた。日本と或る範圍、或るスケ

イルで一戰して敗戰し、それを機會に長期戰爭の形式をとり、國內のナショナリズムを高潮させて戰時狀態の中に自己政權を中軸にして政治、經濟、軍事の獨裁權を更に强化しやうとするのであらうと見て居た。すると、何故に上海に事を釀したかといふことになるのである。

本來から言ふならば、蔣介石の安全の路は戰爭を北支に限定するといふことであつた。そこで上海に大山大尉及び水兵射殺事件が發生した當初は、僕等の胸に來た直感は、『蔣介石の統制力が弛んだな』といふことであつた。といふのは當時の南京の蔣介石の周圍には『全面戰爭的主戰派』と『北支の局面的戰爭に限定する』といふ主張をもつた二派の對立があつた。前者には西南から來た白崇禧や馮玉祥、孫科、蔡挺楷、于右任、戴天仇、陳誠等、後者には汪兆銘、何應欽、陳果夫、陳立夫、宋子文、吳鼎昌、張公權等があつた。蔣介石はこれ等の對立の上に跨がつて南京では何とかケリをつけたつもりであつた。であるが主戰派の顏觸れを見ると陳誠を除くほかは何れも胸に一物を藏する手輩ばかりである。主戰論の第一目標が蔣介石の足もとを覗つて居ないとも限らないのである。のみならず、在來蔣介石の手足となつて國民運動管理の

强力なフレイムを構成してゐた黨部の地方官吏や、軍隊の青年將校、各地保安隊の青年幹部が今日どうなつてゐるか、彼等は過去十年間抗日と對日復仇の目標の下に訓練され、結束して來てゐるのである。勿論、對日主戰論に傾倒する。煽動の手一つで如何なる事變をも起し得る客觀情勢にあつたのである。上海附近の保安隊には如何なる筋から煽動の手が延びて居ないとも限らない。そこで大山事件の背後には南京政府部內の對日主戰派が、今尙二の足を踏んで居る蔣介石を引ずり込むために、上海に事を起して蔣介石の決心を促さうと策動したものであらうと想像したのであつた。

これに對して蔣介石がどう處置するかといふことが僕等には非常な興味であつた。當時の南京政府の對度を見れば判るやうに大山事件の勃發當時は蔣介石はひたすら局地現地における解決を焦つてゐる。事件を擴大延長させまいとする周章ぶりがあり〳〵と見える。伊太利外相のチアノを通じて日本に全面的な妥協を申し込んで居る。また直接には許世英を通じて日本に妥協の探りを入れて居る。また現地においては停戰協定關係國大使に斡旋を依賴してゐる。何と

か局面を糊塗しやうといふ焦燥ぶりがあり〳〵と讀まれたのであるが、局地の事態は逆行した。蔣介石のたがが弛み、全面的統制が利かなくなつて居るのではないかと僕等が思ふのは此の點である。

然し蔣介石と雖も只の鼠ではないのである。轉んでもただでは起きない。暴風雨の中で錐もみをして居るのではあるまいか。果して浮び上れるかどうか、この錐もみが成功するかどうか、此處に蔣政權の活路が發見されるかどうかといふことになるのである。主戰派の策動に對して裏がかけるかどうか、といふことになるのである。

蔣介石は日本に對する糊塗的妥協策が利かないと見るや、實に驚くべき速度をもつて、上海租界に對する攻擊態勢を整へたのである。實に神速なる頭の轉換といはねばならない。『上海租界全體に重壓を加へる』といふことが目的であるやうに思ふのである。といふのは、北支事變が勃發以來蔣介石には甚だ物足らないものが一つある。寧ろ意外であるとされてゐるものがあるのである。それは英、米、露の態度である。北支事變前のこれ等諸國と支那との關係を東三

省事變前の關係に比較すると、遙かに密接であり實質的に深い關係をもつてゐる。その上、日本は當時よりも遙かに世界の憎まれ子になつてゐる。日露の關係は切迫してゐる。從つて當時あれだけ騷いだ列國のことであるし、滿洲事變よりも幾倍か利害關係の深い北支事變に對して列國が寧ろ傍觀的態度をとつてゐるのは甚だ意外としてゐるのである。スペインにすらあれだけの關心をもつた列國が、今回の事變に何等日本牽制の手を下さない、全く當が外れて居るのである。蔣介石が『上海租界全體に重壓を加へる』ことを決意したのは、此處に重點があると思ふ。端的に言ふと、今回の事變を單に日支間の問題とせず、複數にしてその間相互牽制の機運を作つて活路を見出さうとする藝當をしてゐたと見るべきである。

この意圖が盛んに行はれたのは支那空軍の盲滅法の上海爆擊である。

支那空軍の上海盲爆

支那空軍の上海爆擊を見ると無茶苦茶といふよりほかない。餘りの亂暴振に驚かざるを得ないのである。何故斯うも無茶をするか。第一に技術が劣惡だといふことが考へられる。第二

に、目標に不案内だといふことが考へられる。第三に、共產黨または人民戰線派の手が廻つてゐるのではないかと考へられる。第四に列國の干涉を殊更に求めんとする作爲であるといふことが考へられる。第五に蔣介石がヤケクソになつてゐる。いろ〳〵と想像されるけれども、僕等は今のところ第四に最も重點を置いて考察されていいやうに思ふのである。英、米の軍艦の側に落したり、カヤセイ、パレスホテルなど英米を最も刺戟するやうな場所に落したり、大世界あたりの上海で最も人だかりの多い場所を選んで落してゐるところを見れば、世界に最も刺戟を與へるやうなポイントを押してゐるのである。五年前福建獨立運動の時に蔣介石の飛行隊は福州の十九路軍の根據地や、福州の獨立政府を爆擊した。その時の爆擊技術は實に天晴れであつた。地圖の上にマークされた爆擊目標に對して完全に當てて居るのである。勿論當時の爆擊戰には相手に高射砲はなく、天候は良かつた。それから五年經過し、その間支那空軍は血みどろになつて訓練整備をして來たのである。機械は優秀になつて來てゐるし技術は上手になつて來てゐると考へるのが常識である。或は機械だけ優秀になつて技術が追つつかないといふ缺

點はあるかも知れない。

それにしても、殊更に列國の注意を惹くやうなポイントを選んで、爆擊してゐるところを見ると過失ではあるまい。深い魂膽あるものとしか考へられないのである。支那空軍にとつては上海の土地が不案内だといふこともどうかと思ふ。また爆擊の目標を誤るといふこともないではなからうが、日本の軍艦と英米の軍艦とは、色彩からして異ふ。遠くからでも一目して判るやうになつてゐるのである。

事變發生以來、蔣介石はいろ〳〵な點に於いて在來の日本認識の錯誤を體驗したことであらうと思ふ。その中で最も蔣介石の胸を衝いてゐるのは、堂々たる日本の積極的發動力であらうと思ふ。日本が一瞬にして上下一致して重斧を差向ける可能性があらうとは、夢にも思はなかつたのである。

南京から日本を見てゐると、日本の內部對立、相剋は可なり深刻であるやうに見える。日本の經濟、財政は甚だ悲觀すべきものであるやうに見える。また日本の國際關係は頗る惡るいや

うに見えるのである。悲觀材料ばかりが自然と南京の目に映る。從つて北支事變前南京政府のとつた對日對度は、日本の支那に對する積極的發動力が、從前の通りに强烈なものでないといふ見解の下に仕組まれたものであつた。北支事變前の露骨な積極、攻勢的な態度は寧ろ日本を輕蔑してゐる風さへあつたのである。然るに事變が勃發して日本は猛然立上つた。支那の新聞が言ふやうに日本は一夜にして相貌を變じたのである。一夜にして變つたのでなくて日本の本來の面目が現れたまでである。そこで寧ろ虛をつかれて居るのは蔣政權である。

北支事變が勃發してからの蔣介石のやり方は錯誤の連續であり遂に自己政權の根帶を搖がす危險ある全面戰爭にまで事態を導いて來たのである。蔣政權は蔣介石の意想外な事態の發展によつて最後の土壇場まで押し詰られてゐるのである。蔣介石といふ男は、どんな場合でもヤケクソにならない、極端なリアリストである。決して投げない。最後までねばつて見る。その最後の一手が上海租界全體に加へられた重壓ではないかと思ふ。今までの大勢から見て、英、米、露、佛は結局は日本の行動を牽制し得ない。といふのは、日本が直接に彼等の權益を阻害しな

い。列國にとつては日支關係の發展を傍觀して居ても直接火の粉を蒙らない。直接火の粉が列國の頭上に到達すれば、必ず收拾に騷ぐのである。

列國の靜觀的對度は、火の子が未だ彼等の頭上に達しない爲だと蔣介石は考へたに異ないのである。その證據を出せと言はれれば具體的な證據はないが、何故に上海租界全體に重壓を加へる必要があるか、列國の權益を戰爭に捲きこむ必要があるかといふことを考へると、蔣介石の魂膽の一端に達するのである。

放つて置けば日本は堂々とやつて來る、全面戰爭になる。勿論蔣介石は勝算のないことを知つてゐる。負けた責任は蔣介石が全部的に負はねばならない。日支戰爭の直接危險の負擔を英米の上海附近の權益の上に直接波及させる。とすれば、英米は一時は大いに怒る。が結局上海に於て徹底的な防禦力をもたない列國は、戰爭を嫌がるに違ひないのである。そこが蔣介石の上海爆擊の狙ひどころではあるまいか。特に英國の玆數年間の對支態度は蔣介石の中央集權を强化して統一母體の上に政治上、經濟上の權益を伸張するといふことであつた。蔣政權の强化

を前提として居る。英國が蔣政權の動搖を欲しないことは蔣介石に自信がある。

又逆に轉んで日本と英、米との共同戰線になつても、日本單獨の武力で叩かれるよりも國民の手前に都合がよいし、英、米が介在するといふことは、寧ろ蔣政權自體の生存問題についても都合がよいのである。

要するに支那空軍の盲目的爆擊、南京政府の外交部の自由行動をとるとの聲明、中央軍六ケ師團をもつて上海租界全部奪取の態勢は、一連の目的のもとに行動されて居るやうに見える。列國に對し、これでも傍觀的態度がとれるかと迫つた形であつた。

二、苦惱する蔣介石

日本國內情勢の誤認

北支事變が起つて日本が擧國一致起ち上つて廿九軍の膺懲を敢行したのに對して最も狼狽したのは蔣介石であつた。蔣介石は北支攪亂の張本人でありながら、何故ビツクリしたかと言へ

ば、彼が北支攪亂の手を伸したのは、日本が一致して起ち上ることが出來ないと見て居たからである。蔣介石は日本の國內情勢をかう見てゐた。

『日本には幾多の內部對立相剋の部面があり、共產黨の活動は油斷が出來ず、軍備擴張による經濟財政の破綻は目前に迫つてゐる。國論は分裂し、外交は孤立である。從つて兩三年前のやうに、對支問題に於ても積極的に發動することが出來ない』

この認識のもとに、こゝ一年間ばかりの對日政策は立てられてきた。從つて日本が幾度となく日支兩國の國交根本立直しの外交々涉を持ち出しても、南京政府は鼻であしらつて本氣でこれに應じようとする氣配は見えなかつたのである。今春日本の經濟視察團が渡支し、政治問題を離れて日支の經濟提携を進めて行かうと働きかけた時も、南京政府はあらゆる國內の機關を動員して、冀東政權を解消しなければ經濟提携も圖られぬと、頗る冷淡な態度をとつたのである。これといふのも日本の發動力を輕蔑し、自國の國力を過信したためであつた。これに對し今回七月下旬の北平附近に於ける廿九軍の殲滅戰は實によい實物教訓であつた。又日本が擧國

一致結束して立ち上つた姿は彼等にとつては實に意外であつた。『日本は一夜にして變つた』と支那の新聞は驚嘆したのである。從つて蔣介石は北支事變が次第に擴大して日本の確乎たる決意が示されるにつれて『しまつた』と思つたがもう時は遲い。日本は着々と膺懲の計畫を進めてゐたのである。廿九軍に對する殲滅戰で示されたやうに、日本の實力は支那が思つたやうなものではなかつた。廿九軍といふのは支那の地方軍隊中最も精鋭とされてゐたものである。それが僅か數日の內に殆んど全滅されてしまつた。蔣介石が苦悶するのも無理はないのである。

蔣介石は今回の北支事變の勃發とともに、自分が惡い種をまいたことは棚に上げて、日本が侵略の爲に北支事件を作つたと國內に宣傳した。民衆を煽動して抗日氣勢を揚げたのである。また過去十年間、日本に對する敵愾心を煽つて民心を統一し、自己政權の强化に都合のいいやうに排日、排日で押通して來てゐる。あらゆる機會、あらゆる場合を利用して排日氣勢を煽つて來てゐたのである。この排日氣勢を根幹として支那のナショナリズムが出來てゐる。その盲目的なナショナリズムの潮流に乘つて蔣介石政權は國內を統一することが出來たのである。こ

のナショナリズムの潮流に反對しては、蔣介石の政權は一日も存在することが出來ないのである。このナショナリズムは北支事件が起つて『抗日抗日』と吼えてゐる。蔣介石に日本との決戰をせまつてゐる。自分が蒔いた種とは言へ、蔣介石の苦悶はここにもあるのである。日本と戰はんか、慘敗を喫するは掌を指すごとしである。自己政權の崩壞は必定である。北支の事態をそのまま承認して日本と妥協せんか、自分の手で作つたフランケンシュタインのやうなナショナリズムは蔣介石に喰ひつくのである。進退谷まつて苦惱しつつあるのが蔣介石の今日の實情であらう。

結局、拔け道を歩いて政權保有

蔣介石は世界でも比類を見ない現實政治家である。自分の危險は冒さない。この性格から推して蔣介石の今後とる對策は自づと推測が出來るのである。全面的に日本と戰ふか、然らず。日本に屈服するか、然らず。その中間の拔け道を歩いて結局自己政權を保有するといふことになるであらう。然らばその中間の途とは何であらう。北支事變勃發後の蔣介石を見ると心中の

苦悶を押しかくして、なかなか口では豪語してゐる。また決戰の態度を示してゐる。

たとへば七月廿九日、蔣介石は南京に於いて支那の新聞記者に對し

『廿九軍の敗戰の責任は自分が負ふ。然し天津地方の戰鬪はまだ本格的な戰鬪といふことは出來ない。北平を失つたことは重大な打擊であるが、軍事的見地から必らずしも悲觀を要しない。今後必らず全國民の期待と信賴に副ふことが出來ると信ずる。日本政府は川越大使に訓令して交渉開始のため、南京に急行するやう命じたと傳へられるが、現狀のままでは如何なる交渉にも應ずることは出來ない。去る十九日余が聲明した最低限度の立場、即ち

一、國民政府の政策は自存共存を求め、終始和平を愛護す。

二、蘆溝橋は北平の關門で、從つて蘆溝橋事件がよく解決すると否とは最後を決する限界である。

三、この最後の土壇場に臨んでは如何なる犧牲をも惜まぬ決心である。即ち吾人は常に應戰の準備あるも、好んで戰を望んでゐるものではない。和平いまだ絶望ならざる以前に

於ては終始和平を希望する。但し左の四點の最低限度の立場を固守せねばならぬ。

A　主權領土の完整と侵略を受けないこと。B　冀察行政組織は改編を許さず。C　中央より派遣せる官吏は第三者の任命要求に應ずる能はず。D　廿九軍の駐屯地は一切他の拘束を受けず。

右の四ケ條を日本政府が承認せざる限り中央は斷じて交渉に應ぜぬ。今後は地方解決は一切許さない。支那は戰場に於いて最後の勝利を得ざる限り、日本をして支那の權益を尊重せしめる能はず』と語つてゐる。戰爭を決意してゐるやうでもあるし、さうでもないやうでもある。

幾らも拔け道のある言ひ方である。支那の抗日ナショナリズムに對しては全面戰爭の覺悟あることを十分表現してゐるが、一方にはちやんと拔け道を作つてゐるのである。

一方蔣介石は南京にあつて、連日汪兆銘その他の要人と會合して善後策を協議したが、なかなかハツキリとまとまらない。大體は軍事の大權を蔣介石に一任し、黨及び行政の全責任を汪兆銘に附與して、戰時體制の政治組織を作ることになり

一、黨、政、軍の三機關に對し、全國的戰時體制を實施す。

二、軍事乃至外交、その他國家の大事、軍規に關する臨機應變の措置を擧げて蔣介石に一任す。

三、汪兆銘は中央政治委員會主席として常時、黨政の最高領袖たる責に任ず。

といふ戰時體制を決定したのであつた。

かういふ風に蔣介石は政府内部の形式を整へ、いかにも決戰の覺悟を固めてゐるやうに見えたのである。一方に於ては、長江一帶の日本の權益に對し重壓を加へて經濟斷交を圖り、一方に於いては續々と中央軍を北上せしめてゐる。であるが蔣介石の腹には一物があるのである。

『對日一戰』にも限度

蔣介石も、國民の手前一戰せざるを得なかつた。日本を無條件に撤兵せしむるやうな手段がとられれば別だが、それは今日となつては不可能である。無條件に北支の現狀を承認するか、一戰するかより他に途はなくなつてゐたのである。そこで一戰したのであるが、その一戰の仕方が、蔣介石畢生の智慧の絞りどころなのである。勿論、彼が自己政權の土臺になつてゐるところの精鋭なる整理師團廿三ケ師團を動員して日本に喰つてかかつたところで結局敗戰は免れない。この蔣にとつては虎の子のやうな軍隊を失つたが最後、蔣介石は完全に沒落であり、支那は再び混亂に陷るのである。從つて現實政治家であり、打算に明るい蔣介石は、この自分の命にかかはる實力を消耗するやうな愚な方策はとらない。そこで蔣介石が對日戰に使用する軍隊及び地域には一定の限度があり、その限度において敗戰を覺悟して一戰を交へることになつたのであらう。然しこれとてもギリ〳〵最後の態度で、切羽しつまるまでは何とかして日本軍との一戰を交へることを避けんとしたのではなからうか。吠え立てる犬はなか〳〵喰ひつかない。蔣介石や南京の政治家は全面戰爭も辭せないと豪語した。その口の下から川越大使との外交々渉を欲するやうな運動を裏面でしてゐたのである。

決戰はしたくなし、妥協はしたくなし、そこで蔣介石に考案されたものが『長期抗爭』といふ戰術である。この長期抗爭を說く前に、一應當時動かされつつあつた支那軍隊の所謂抗日準備を見よう。

所謂『抗日戰爭準備』

蔣介石は如何にも決戰するかの如き姿勢をとつて國民を導き、自己に對する國民の反擊を起さしめないやうにする必要がある。又蔣權力とは外樣である各地將領は、この機に主戰論を唱へて蔣介石を窮地におひこむ。そこで、彼は決戰的體形をとり、蔣の地位を覗ふ危險人物の策動を押へるとともに、國民の抗日熱に一應の滿足を與へる。南京の軍事會議は激烈な戰意に燃えたものの形をとる必要がある。國民に答へる形で蔣は先づ八月八日前後を期して全線に進擊命令を發し、中央軍の出動とともに日本軍攻擊の火蓋を切る體制をとることとなつた。すでに南京に集つて來た閻錫山、白崇禧、余漢謀、黃紹雄、劉湘、何成濬らの地方將領またこの中央の方針に絕對的支持の叫びをあげ、廣大なる戰線を利用して長期戰爭を展開すると絕叫した。踊つてゐるのだ。そこで首腦部會議は長期戰爭の最高陣容を決定した。蔣介石が陸海空軍の總司令として一切の軍權を支配するほか、白崇禧は參謀總長となつて蔣介石を輔佐し、山西、綏遠、察哈爾方面卽ち左翼前線の總司令は閻錫山、同副司令は傅作義が、平漢線を作戰基軸とし

て展開する中央戰線の總司令は劉峙、同副司令には馮治安が、津浦線を脊柱に山東省一帶に布陣する右翼戰線の總司令には韓復榘、同副司令には胡宗南がそれ〴〵就任、平綏、平漢、津浦三鐵道に沿ひ、三路より進擊し、共產軍は別働隊となつて中央と呼應して白崇禧の作戰計畫の下に活動するはずで、これと同時に戰時體制の一切の責任は宋子文が引き受けることになり、また北支一帶に潛入せるC・C團、藍衣社の分子なども日本軍の後方攪亂をなし、バルチザン式戰法で日本軍を奔命に疲れさせ、長期抵抗を側面的に援助して支那軍の軍行動を有利に轉換さすべく、既に菌絲運動を開始したと傳へられてゐた。

この大規模の抗日戰備に動員された中央軍、中央傍系軍、共產軍の總兵員數は約五十萬と稱せられ、その配備狀況は平漢線を主力作戰地（中央戰線）とし保定を最前線に、石家莊、正定を第二線に、順德、大名を第三線に更に、瓏海線鄭州を最後の一線として四段の構へをとり、保定附近に北平より敗走した第卅七師馮治安のほか蔣介石直系の第一〇師（李默庵）第一三師（萬耀煌）をはじめ萬福麟軍たる第一一六師（繆徵流）第一三〇師（朱鴻勛）騎兵第四師（王奇峯）のほか第一二

九師（周福成）騎兵第十師（檀白新）が先鋒となり、第二、第三線の間に商震軍たる第一三九師（黃光華）第一四一師（李鴻文）第一四二師（呂濟）のほか舊西北系の孫連仲軍たる第二七師（馮安邦）第三〇師（孫連仲）第三一師（池峯城）及び第三九師（龐炳勛）第四四旅（張華棠）第九一師（馮占海）等、總兵數約十五萬に達してゐる。

山西省より綏遠省に進出し、察哈爾省を侵し平津の背後を襲はんとする右翼戰線の兵力配備は、懷來、宣化間に蔣直系の湯恩伯軍に屬する第八四師（高桂滋）第八九師（王仲廉）第四師（王萬齡）等約三萬、張家口附近に第一四三師（劉汝明）約一萬五千、その背後たる大同、平地泉には傅作義軍の騎兵第一師（張誠德）騎兵第二師（黃顯聲）さらにその背後には同じく傅作義軍の第七二師（陳長捷）第七三師（劉奉濱）及び西安事變に際して勇名を馳せた第四六軍樊崧甫麾下の第二八師（董釗）第四三師（周祥初）第七九師（陳安寶）等約十萬が虎視眈々と布陣し、この左翼戰線は、わが軍の同方面に對する手薄に乘じて、軍用列車で眈々平綏線を南下し、八日つひにその先鋒は土肥原、秦德純協定を蹂躙して察北六縣中の赤城、延慶を不法占據し、長城線南口鎭を

窺ふに至つた。

さらに眼を津浦線方面の右翼戰線における兵備に注ぐと、京津方面から敗退した張自忠の卅八師が馬廠の一戰にあつて逆擊態勢を示してをり、第八五師（陳鐵）韓復榘軍の第二九師（曹福林）第八一師（展書堂）第二〇師（孫相萱）が續々と北上し、東光、濟南の附近に進出し、第二二師（谷良民）第七四師（李漢章）騎兵第二四旅は膠濟線に沿うて青島を包圍し、稅警團約八千と相呼應して青島には一人の日本兵をも上陸させぬと敦圍いてゐたが、この方面の總兵數は約八萬と推定されてゐた。

しかもこれ等の諸軍隊の背後には隴海線に沿つて十二個師の大兵力を集結して、前線各師の援護をなすとともに、その督勵に當つてゐた。即ち中央戰線の基地たる鄭州方面には、蔣介石直系の第五八師（俞濟寺）第九八師（夏楚中）第八三師（戴戡）第一八師（朱耀華）第一四師（霍揆彰）及び第三三師（馮興賢）第四八師（徐繼武）第五九師（張發奎）がそれで、これ等部隊は、中央軍の最精鋭で、半ば以上機械化された有力なものであるとのことであつた。

さらに右翼戰線の後詰めとして、徐州に進出してきたのは、これまた蔣介石直系の第一師（胡宋南）第三師（李玉堂）第六一師（揚步飛）第九七師（孔令恂）等で、これ等諸部隊は、前記の山東省進駐中央軍と聯繫、事變以來靜觀的態度をもつて洞が峠をきめこんでゐた韓復榘をして、つひに抗日共同戰に拉致するの原動力をつとめた。

なほ前記進駐の中央軍は、所定の駐營地に尨大な陣地を構築、戰備に汲々としてゐた。このほか濟南、順德、登州、正定、大名、その他の既設飛行隊の擴張、飛行場の新設に努めてゐたのである。

この他南京最高軍事會議では、北方に對する抵抗線の强化を計るとともに、日本よりの全面的攻擊の憶測に怯えて、長江一帶から南支に到るまで戰鬪體形を整へしめた。卽ち廣東綏靖主任余漢謀をして南支海岸防備の全責任を、また廣西綏靖主任李宗仁をして南支後方陸上輸送力の確保を、更にまた雲南主席龍雲をして同地、四川一帶の中央軍最後的根據地確保のため專ら治安維持に當らしめる全責任をそれ〴〵負はせたのである。

また八日の全國軍首腦部を網羅する國防會議では、前記戰線配備の大體的完了を見て氣勢大いに揚り、いよ〳〵第三次動員に移ることとなり、八日夕刻南京で待機中の中央軍機械化部隊は九日朝にかけ、裝甲車、戰車、野砲、山砲、高射砲、重機關銃を滿載し、中央戰線に向つて北上を開始した。なほ南京を中心とする長江下流部隊も盛んに移動し、鎭江、蘇州等の滬寧沿線各地はこれ等移動部隊で充滿してをり、抗日軍の大本營たる南京城は、敎導師以下步兵學校生五千、軍官學校生五千、軍官學校訓練班二千、舊訓練班千五百、步兵學校生徒隊四千その他騎兵、砲兵、輜重兵等の特科隊五千、計三萬の勢力と、野砲五十門、山砲四十門、迫擊砲約百門をもつて固められ、別に憲兵二個團と武裝保安隊三千が戰時戒嚴令下に、各城門と市內外の要所に配置され、水も漏さぬ警戒陣を敷いた。その上海の防備も保安隊增員の名によつて、總數約二萬五千が停戰協定地區內に集結してゐたが、この他、長江沿岸の南京に至るまでの要塞、吳淞、江陰、土山、象山、獅子山等も、それ〴〵多數の高射砲等、要塞砲を配置して强化され、このところ支那は抗日戰備に實力のあらん限りをつくしての狂奔ぶりを示してゐた。

長期戰爭、遊擊作戰とは？

支那はここにおいて長期戰爭を考へる。すでに勇ましい日支全面戰を叫びながらも、華々しい戰爭は目下の支那の力で出來るものでないし、勝目のないことを知つてゐるので、彼等流の考へで日本の痛い點に觸れると思つてゐる戰術、卽ち長期戰爭の叫びをあげてゐた。

支那は日本が長期戰爭に耐へられぬと考へてゐる。日本の財政が相當危機に瀕してをり、國民の負擔能力の限度に達してゐると考へてゐるのである。更らに國內には諸種の分派があつて、中々國論の統一が出來ないとなし、今次の事變で擧國一致の實を示してはゐるが、熱し易くさめやすい日本人の性格から、戰爭が長びけば戰爭に我慢が出來なくならう。そこで國民の間に不平が起つて來、再び分派抗爭が起り、そこへ財政上の壓力にたへかねる心が反撥するに至り、日本は收拾不能に陷るであらう、かかる傾向を一層激しくするものは日本の經濟的基礎である。日本が長期戰爭に必要な軍需資源は日本國內では出來るものでなく、外國から求めてゐる。棉花も鐵も石油も大部分を外國から買つてゐる。更らに國內生產品は殆どその原料を國

外に求め、これに加工して自國の消費にあて、外國輸出品を作つて、國內のストックは長期戰に耐へられない。これらの重要資源の購入は勿論、國內生產品の原料の購入も、長期戰による財政破綻により購入能力が極度に低下し、戰爭の物力がなくなる。その上に長期戰ともなれば默つてゐた列國も、共同干涉の手をのばすべく、その時は日本は力が弱つてゐるから列國の共同干涉に屈せざるを得ないことになる。列國は日本より支那に好意的であり、外交となれば支那の得意であるから、その時支那に有利な解決法がとれることになる。支那はかく考へる。すでにかうした考へ方は支那の新聞雜誌にしば〳〵揭載され、甚しいのになると日本は內部に革命が起るといふ風に深く信じてゐるのである。而も長期戰において、日本より遙か立場が不利な彼等は、自國の抵抗力を次の如く理由づけてゐるのである。彼等は『支那の財政は日本の半分にも充たないし、軍費は三分の一に近い。然し乍ら、支那人は日本人より數倍も困窮にたへる。生活程度はぐつと低い。從つてその兵に要する費用は十分の一で足りる。これをもつて日本の一ケ師の費用で支那は十ケ師を維持出來るのである』と高言する。更に日本の兵力量に

ついては『支那に動員出來る兵力は二百廿萬見當で、この中に作戰に參加し得るものは百萬に過ぎない。上海事變にはわづか卅四日の戰鬪で二萬人(大ヨタだ)の死者を出した。將來戰爭において一年間に日本軍は卅五萬の死者を出す計算になる。かういふ風に計算すれば、戰爭が更に大きく長期に亙れば、日本軍は三年を出ずしてなくなつてしまう——南京新日報所載の論文より——』かゝる勝手な算定に立つて自分を慰めてゐる支那である。更に同論文の筆者生斐なる男は次の如く續ける。

『…は殺人利器(空軍、海軍——等彼等は支那陸軍は對等或ひはそれ以上と考へてゐる——)に於てすぐれてゐるとはいへ、これらは數個の重要都市、海港等に示威し得るだけで、支那の天然地理の形勢を利用しての作戰の下では、彼の利器の效用は失はれざるを得ない。支那の持久戰的抵抗にあつては、三年を出ずして、日本の武器製造原料は缺乏し、國內は困窮してしまふ。西歐のファッショ國家が日本を援助すべしと雖も、歐洲は他を顧る暇なく、東方の盟邦を援助する能力は極く小である。支那の力量を見るに軍民一致し國民は感動して

戰線に向ひ、抗日統一戰線は成功してゐる。陸軍は三百萬ばかりあり、これに省の民團、保安隊、義勇軍を合して四百萬、最近全國で軍事訓練をなしてをり、これ等はすでに數百萬の大數にのぼる。彼等を武裝せしめて戰線に送ればよく、全國農村を武裝組織し、遊擊戰の訓練を施し、全國各地の遊擊隊が、地形の優越條件を利用して敵に重傷を與へ、且つこれ等が正規軍と結合作戰をなせばよいのである…かくては恐日病や武器を恐れる論者の間違つてゐることが明かであらう』

をかしな推論であるが、支那人の主戰論者はこの程度の淺はかな認識に出發してゐるのである。何でも長期戰爭さへやれば日本が弱ると考へてゐるのである。

かかる見解に基いて長期戰爭論が現下支那の日支戰爭論の根本をなしてゐるのである。又前の方にのべた如く、蔣介石は戰爭はしたくなし、やらねばならないといふ苦境にあり、戰爭をなして國民の滿足を買ひ、同時に戰爭による打擊をさけて、有利な交渉解決をなすといふ相反する二つの目的を合致せしめるためにも、長期戰論にのりかかつてゐるのである。

長期戰として支那の考へる方法はどういふ風なものであるか。彼等は戰爭になつて海岸線の封鎖に備へ、陸路ソ聯への出路としての西北、陸路ビルマ、佛領印度支那への出路としての雲南、更に、日本勢力の及び得ないとする香港への出路として廣東の三方面を重視し、この三方面の武裝と、交通路の開發をなし、この三方面から武器、彈藥、食料の支給を受けるやうにする。而して首都南京始め主要都市の空爆にそなへて、四川、陝西方面に遷都するほか、重要工場を移轉し、或る程度日本軍の進擊を誘發する。かくて彼等が最上の手と考へる遊擊作戰をとるといふのである。この遊擊作戰が彼等の最もねらふ戰術で、長期戰爭における彼等の戰鬪行動なのである。彼等の考へる遊擊作戰とはどんなものか。

支那人はこれを定義して次の如く云ふ。『遊擊戰は一種の大衆鬪爭で、この戰爭は必ず祕密の配置をなすが陰謀ではない。ある地點に至つて發動するもので、遊擊隊の組織は農民、勞働者、小市民、學生を以て組織する――南京新民報所載遊擊戰爭より――』つまり軍隊の戰鬪を側面より援助し、軍隊の鬪爭を容易ならしめ、遊擊隊により後方を攪亂して奔命に疲れしめる

といふのである。支那軍は軍隊自身が正面から堂々の戰鬪をなすといふよりは、全體が遊擊隊的素質しか持つてゐないのである。彼等は逃げる作戰に秀でたりと考へる軍隊であり、今次の戰爭において物々しく配置された地方雜軍、中央軍ともに、むしろ正面からの戰鬪は或る程度までしか行ひ得ざるべく、やがて遊擊隊行動に移る危險が多いのである。而して軍隊中雜軍は前面に押し出され、軈て日本軍に叩かれて匪賊化する運命にある。これ等を支那人は遊擊隊といひ、遊擊隊化するのである。更に軍隊として遊擊任務に最初から豫定されてゐるのは共產黨である。彼等を北支に前進せしめ、北支の赤化を計り、陰謀を起し、後方攪亂によつて日本軍を奔命につからせる。この戰術はすでにとられてゐるのである。これ等についで農民、勞働者、小市民、學生を以て組織する遊擊隊を活躍させようといふのである。これらの遊擊隊の任務を次の如く規定してゐる。

『第一に抗敵、漢奸組織に反對し、すべては支那軍の間諜となつて活動すること。第二は敵の後方を攪亂して、敵の進軍輸送を擾亂すること。第三には各地の遊擊隊は連絡を保ち、各軍

と連絡し、自己の責任を全うすること。第四には遊撃隊は民衆を組織し、訓練し、新しい遊撃隊を編成すること』

である。而してこの四大任務を中心に次の二つのことを最も重視してゐる。

（一）、正面衝突をさけ、至るところ敵の弱點を利用し、挾撃、側撃によつて勝利をしめること。（二）機械力によつて勝つのではなく地形によつて勝つ方針で、而も多數の群衆の掩護の下に行ひ、消滅せしめられないやうにすること。而して遊撃隊は敵の無防備の虛をついて多大の損傷を與へ、群衆にまじつて事を行ひ、敵を深く誘つて、行動不能のところにおいて敵の地理不案内を利用してこれを逆襲する。

といふのである。

かかる戰術は共産軍が蔣介石の討伐軍に對して行つた戰術であり、伊エ戰爭においてエチオピア軍がとるであらうと思はれたゲリラ戰の一種であり、滿洲匪賊の常套手段でもある。こんなものに日本軍がやられて堪るものでなく、且つ日本軍も支那軍のズルさ、匪賊には相當經驗

をつんでゐるから、支那の思ふやうには行くものでない。日本軍は非戰鬪員が戰火の犧牲になることを恐れるから、ときゞ〳〵非戰鬪員らしい顏をした奴等にだまされる危險がある、正義を愛するものの悲劇だ。支那はこゝを利用するのである。日本軍が識別不能に陷るところをねらふのである。通州事件なども一種の遊撃戰術なのだ。これが一番日本にとつて苦しいことではある。そこを彼等は覗つてゐるのである。而してこの遊撃戰の效果を宣傳して、一段の排日熱にうかされた民衆をおだてあげて遊撃戰にかりたて、軍隊中でも自分にとつて大切でない雜軍を押し出し、自己の大事な中央軍は出來るだけ保持しようといふのが蔣介石の戰術であるといふのだ。そこで彼は叫ぶ長期戰！これはかつて汪兆銘が云つた『一面抵抗、一面交渉』の外交用語と同樣に支那ならでは思ひもよらぬ戰爭方法でもある。だが長期戰によつて苦しむのは、日本でなくて支那なのである。いくら困窮にたへられる支那人とはいへ、食はずにをれない。彼等は長期戰の名によつて、自己の首をしめるのである。すでに上海方面の市場の混亂や重要都市の避難民の洪水はこれを物語つてゐるのである。更らに長期戰の苦しみから騷ぎ出すの

は支那で、脆弱な政治的地盤にたつ南京政府は、各地の叛亂に苦しみ、支那を四分五裂の狀態に導き、やがて蔣政權自らを死地に陷れるのである。

三、どたん場に追はれた蔣

日本の實力を誤算した蔣介石

戰爭の進展につれて、國民政府の獨裁者蔣介石には『意外』なものゝ連續である。『誤つた！』といふ感じで一杯であらう。それは何ゆゑか。日本がこれほど『底力』があらうとは夢にも思はなかつたからである。そも〳〵からが日本の認識を誤つたことから出發してゐるのであるから、意外から意外が飛び出すのは無理のないことである。蔣介石が『しまつた！』と思つた時はもうサンド・ポンドに足を突き込んでゐるのだ。もがけばもがくほど深みにはまつて行く。今の蔣介石は丁度サンド・ポンドにはまつた旅人のごとく哀れな姿である。

しからば蔣介石は日本をどういふふうに見てゐたであらうか。

一、日本は無限に軍費が膨脹した結果、國內の經濟狀況は今や極度の恐慌狀態の危機を現してゐる。公債の停滯の如きはその最も顯著な例だ。

二、日本の國民生活が凋落、深刻となり、政府に對して不戰の情が濃厚である。

三、日本の對立相剋は深刻である。

四、日本は國際的に四面楚歌である。

五、日本の共產黨に對し、日本政府はすでに對策なきに至つてゐる。

六、政黨と政府との衝突は時の問題である。

七、日本の滿洲政策は破綻に瀕してゐる。

こんな具合に日本を見て來ると、日本は戰爭は出來ない。一時は出來ようけれども、支那がもし『長期戰爭』の氣構へを示せば日本はペシャンコだと考へたのである。支那が盛んに『長期戰爭長期戰爭』と宣傳したのは、日本に對する一種の恫喝であつた。その證據には、議會において近衞首相が『支那が反省せざる限り日本も長期戰爭の覺悟がある』旨の演說をすると、

今まで囂々として放送されてゐた支那の『長期戰爭』は一時に鳴りを鎭めたではないか。

今や日本は陸に、空に、海上に着々と適切有效な暴支膺懲の手を延して、國民政府の心膽を寒からしめてゐる。日本の表面に表れなかつた『底力』がさうなし得るのである。この底力の判定を蔣介石が誤り、自國の國力を過信して日本を馬鹿にしたことが誤りのもとである。苦悶する蔣介石よ、國民政府よ、何處に行く？

南京を捨れば國民政府は沒落

國民政府の『意外』の第一は日本の空軍の威力であらう。今や國民政府は全く日本の空爆下に曝されてゐるのである。過去のたびたびの南京空爆は目標が割合狹かつた。戰術上からいつても先づ敵の飛行機、飛行場、格納庫等空軍の根據地をたたいて制空權を確保するといふことが第一段である。從つてこの期間の爆擊目標は限定される。南京空襲に對して國民政府がなほ南京に頑張れたのは、日本空軍の攻擊目標が限定されてゐたからである。この第一期の作戰は略々完了して、江南の制空權はわが手にしつかりと把握された。これから第二段に移るのであ

る。十九日午前、午後に行はれた日本の大規模の南京空爆はその第一歩であるのだ。國民政府が果して南京に居据り得るか、蔣介石が飽くまで南京を死守し得るか、國民政府、蔣介石、全くキハドイ瀬戸際に追ひ込められたことになるのである。といふのは、一度び國民政府が南京を捨て他の地方に遷都せんか、國民政府は中央政府としての機能を發揮することは出來ない。蔣介石は國民政府の獨裁者として全政治、經濟、社會の機能をコントロールすることが出來なくなるのである。國民政府は一落して地方政權となる危險があるのである。何故なれば今日の國民政府は滿洲事變當時に比してさらに中央集權の度が進んでゐる。政治、經濟、財政、社會の中樞組織は悉く上海、南京に集中されてゐるのである。國民政府が他に遷都することになれば、とりもなほさずこの組織の中樞を離れるといふことになり、國民政府沒落の第一歩を踏み出すことになる。また一度蔣介石が南京を捨れば、軍隊の士氣も、さらに振はなくなるだらう。全面的敗戰が目前に迫ることになるのである。從つて國民政府は石に嚙じりついても南京を頑守せざるを得まい。といつて日本の空襲はます〳〵大規模、强烈になるのである。蔣介石

の進退は全く谷まつたといふことになつた。

長谷川第三艦隊長官は十九日附をもつて外交機關に對し

支那軍の敵對行爲を終熄せしめ、以て時局の迅速なる收拾を促すは我軍の作戰の目的とする

處にして、南京は支那軍作戰行動の中樞なりと認め、我海軍航空隊は九月二十一日正午以後

南京市及び附近における支那軍隊、並に作戰及び軍事行動に關係ある一切の施設に對し爆擊

その他の加害手段を加ふる事あるべし。右の場合においても、友好國の權益及び國民の生命

財産はこれを尊重する意向なること勿論なるも、日支交戰の結果萬一にも危害の及ぶことな

きを保し難き狀況なるに鑑み、第三艦隊長官においては南京市及び附近に在住する友好國官

憲及び國民に對し自發的に適宜安全地域に避難の措置を取られんことを强調せざるを得ず、

尙揚子江上に避難せらるゝ向及び警備艦船は下三山上流に避泊せられんことを希望す。

といふ通告文を發したのは、いよ〳〵南京に徹底的爆擊を加へ國民政府の死命を制せんとす

るのであつた。さなきだに國民政府の役人は浮腰立つてゐる。病氣と稱して田舍に逃ぐる者が

續出してゐる。蔣介石は假病を使つて逃亡するものは極刑に處すといふ嚴重な命令を下してそ

の足止めに腐心したのだ。長谷川長官の決意に對し國民政府の狼狽ぶりは目に見えるやうだ。

それでも一應は虛勢を張つて見るのが國民政府の政治家の癖である。十九日緊急會議を開いて

『遷都を斷行することは國民に對する影響が甚大であるから、未だその時期でない。各自最大

限度の自重をなす』といふ申合せをしてゐる。斷末魔の呻きである。

沿岸封鎖でまづ半身不隨となる

國民政府の、のど首を締めてゐるのは、海上からの壓力である。日本海軍の手によつて行は

れてゐる支那沿岸の海上封鎖は、じはじはと支那の死命を制してゐるのである。列國の日本に

對する壓力を過大評價してゐる國民政府が、たとへ海軍力はあつても、これほど大仕掛な沿岸

封鎖を敢行し得るとは思つてゐなかつたであらう。支那には巨額の列國の投資があり、對支貿

易は列國の大きな魅力である。これは日本も知つてゐる。殊に英國は過去數年間國民政府の中

央集權の强化を援けて來た。四面楚歌の中にある日本が列國の機嫌を害してまで沿岸封鎖はな

し得まいと考へてゐたのである。日本の「底力」を輕視したのである。ところが日本は敢然として封鎖を宣言した。支那沿岸全部における支那船に對する封鎖を宣言したのである。もちろん第三國の平和的通商には何らの妨害を加ふる意志ないことを併せて宣言してゐる。

支那の海外貿易は主として外國汽船によつて行はれる。自國の汽船による場合はほとんどないといつてもよい。であるが、支那が今日一番必要を感じてゐる武器の輸入は、非常に困難になるのである。列國が自由に武器を支那に入れるといふことは戰局をますます深刻ならしめ、東洋不安を長びかせるばかりであるから、平和的通商とはいふことは出來ない。日本は自衛の手段をとらざるを得ないだらうし、列國の武器商人も危險を顧慮して消極的となる。これだけでも支那は大分痛いのである。平時でも支那は米國から毎月七十萬ドル以上の飛行機を買つてゐた。

ドイツ、イタリー、英國、チエコスロバキア等から買入れる武器は相當巨額に上つてゐたものである。これが事實上阻止されることになるのである。從つて支那が外國に通ずる路は僅かに

九龍鐵道によつて香港から廣東に、廣東から粵漢鐵道によつて漢口、または株州から杭州に出る鐵道を利用するか、佛領インド支那との陸境貿易によるか、新疆、外蒙古を通じてソヴイエト・ロシアと通ずるより外なくなつた譯である。支那はソヴイエト・ロシアと不侵略條約など結んでロシアと結託し、危險な泥沼に足を踏み込まざるを得なくなつた。封鎖によつて被る外國貿易の影響は右の通りであるが、一番打擊の大きいのは沿岸貿易である。支那は自國の汽船によつて毎年三、四億の物資を動かしてゐる。又ジヤンクの輸送による物資も一億元を下らないと推算されてゐるのである。この物資の流通が全くストップした。支那國內經濟の大きな動脈が一本切れた譯である。ジヤンクや、支那沿岸航路の汽船によつて立つてゐる南支沿岸の各都市は、次第に商業機構が破壞されて不況に轉落するのである。わが空軍の爆擊はこれに拍車をかけ、各地の商業は金融機關の不活動と物資の缺乏によつて半身不隨の狀態に陷つてゐる。支那の經濟的不安はますます濃厚になるのである。

財政經濟の全面的破綻近づく

戰爭の進展につれて支那の經濟的打擊はますゝ深刻になつて行くやうである。南京政府は戰爭勃發とともに、今日支那經濟の根底をなしてゐるところの幣制維持のために、國幣妨害懲治暫行條例といふ、これを犯したものは極刑に處すといふ、嚴令を出して補救工作をしたのであるが、國民政府の信用の低下と、紙幣濫發のため次第に危くなりかけてゐる。上海附近の戰爭でわが軍の捕虜になつた敵兵のもつてゐる紙幣を點檢して見ると、悉く古い紙幣である。四明、浙江實業、金城銀行等の紙幣や、四川、湖北等の地方銀行紙幣であるさうである。これらの銀行は一昨年秋の幣制改革によつて紙幣發行權が停止され、既發の紙幣は財政部に回收されつつあつたもので、その額すでに數億元に上つてゐたのである。これがまだ燒却されずに財政部の倉庫に殘つてゐたものを引き出し、兵士の給料に當ててゐたことが判明したのである。新しい紙幣であれば、すぐ濫發の事實が察知されて紙幣の信用が墜ちる。古いものならちよつと判別がつかない。國民政府はそんなインチキをして紙幣の濫發をカムフラージしてゐるのである。しかしそれもいつまで續くやら。國民政府が一度南京より移轉すれば幣制は一度に大動

搖することを免れない。支那經濟の致命的打擊となるものである。

その他國民政府は公債市價の維持、爲替管理の强化、民間銀行の管理、預金引出しの制限、貿易統制の實施、取引所の統制、物價の統制等非常時體制をとつて經濟界の大動搖を防止することに躍起となつてゐるが、これも一度一角が崩るれと全面的破綻となる危險性を十分に藏してゐるのである。國民政府が日本の空襲下に怯えながらも、尙南京を死守せんとしてゐるのは、この統制力を保たんがためである。南京が落ちたが最後、國民政府の財政經濟的統制力は半減し、支那は收拾のつかない經濟的破局に陷るであらう。

さらに面白いのは、支那の救國公債五億元の募集難である。上海に本據を有する浙江財閥は戰爭の影響を受けて相當まゐつてゐる。在來持つてゐるところの國民政府の公債にさへ不安を感じてゐる。今さら五億元の新手の公債募集どころではないのである。國民政府は宋子文を委員長とし、國民政府のゲー・ペー・ウーの長官ともいふべき陳立夫を副委員長とし、藍衣社、C・C團、青帮、紅帮總動員、側面からは要人夫人や令孃が總出で募集に當つてゐるが一向手

應へがない。發行價格は額面の一割、卽ち額面百圓なら十圓で賣らうといふのであるが、未だに十分の一も賣れない。

一般經濟界は右の通りであるのに、政府財政收入の大宗をなす關稅鹽稅、統稅は全減半減の悲境である。長期戰爭では先に參るだらうと國民政府が考へた日本は廿億の軍費を支出して動搖しない。これも蔣介石の度膽を拔いた『意外』である。

沒落の一途をたどる國民政府

もうそろ〳〵弱音が聞えて來さうなものであると思つてゐると、はたして九月十三日ごろから南京長沙、開封等のラヂオステーションの放送は不思議にも今までの『勝つた』『勝つた』のデマ放送とうつて變つて、上海、平漢、津浦、平綏方面の戰局の不利、日本海軍の海上封鎖によつて、食料、物資の不足、一般民衆の困窮、經濟界の打擊、河南省における鹽飢饉の實情等を放送し、日本に對して結局勝味のないことを知らせてゐた。

國民政府の目的は、何か第二段の轉向の準備行動と見なければなるまい。蔣介石は日本に對

し頑張れば頑張るほど深味にはまつて行くことを感じ初めたのではあるまいか。今に至つて悟るのは時すでに遲いのである。蔣介石獨りの力ではどうにもならないやうに支那自體が動いてゐる。支那自體の反省警戒が先決問題である。支那を自惚れさせ、日本を敵視させたものは蔣介石である。今やこの風潮は大きな力で流れてゐる。蔣介石の力ではどうにもならぬのである。國民政府が敗戰の事實を放送したのは、この間の空氣を說明するのではあるまいか。まづ民衆に日本と戰つて受ける犧牲の大なる事を知らしめて、國民政府の轉囘を計らうとするのではあるまいか。しかしさうでないかも知れない。魂膽は別にあるかも知れないのである。いづれにしても、國民政府は弱つてゐる。南京その他の大規模の空爆はます〳〵これに拍車をかけるのである。

そこで蔣介石が苦惱してゐるのは、このまま戰局を長びかせると自己の統制力が弱體化する心配である。蔣介石の軍力統制の基本的力量である空軍はほとんど殲滅の運命に瀕してゐる。中央軍中の中央軍ともいふべき整理師團の大部分は上海附近に集中されてゐるが、いづれは日

本軍に敗れるであらう。財力は減少する、さうすると自己の獨裁力は弱るに定まつてゐる。その上、南京を落ちて地方に遷都した場合の自分の統制力を考へると、うすら寒い思ひがするであらう。

蔣介石の統制力が減退したが最後、今まで蔣介石の强壓下に雌伏してゐた異分子は、そろそろと策動を初めるのである。孫科、馮玉祥の背後にはロシアがあり、白崇禧、李宗仁は虎視眈眈として蔣介石の沒落を狙つてゐる。それに朱德、毛澤東、周恩來等の共產黨系人物は、今でこそ蔣介石の抗日戰線の一翼として働いてゐるが、何時本來の姿に立ちかへらないとも限らない。蔣介石の統制力が亂れたが最後、國民政府はたちまち內部崩壞の運命に陷るのである。

第八章　蔣介石は沒落するか

一、事實に於ける蔣介石の致命點は何か

致命點は何か

蔣介石政權はどうなるか。今日戰爭が進行中であるのでハツキリした見透しは出來ない。そこでいろ〳〵な假定を置いて見て想定するよりほかないのである。

先づ第一に、日本軍が、どれだけの痛打を與へれば、蔣政權は倒壞するかといふことを考へて見る。蔣介石の獨裁政治機構は、日本で想像される以上に强靱である。この强靱さは、立憲政治や、自由主義的經濟組織の中で呼吸して居るものには一寸實感が出ないのである。その上說明の出來ない一種の彈力性をもつてゐるのである。今日のところ、蔣政權には、まだ致命點がハツキリと表面に出て來て居ないやうに思ふ。この致命點が出て來れば、これさへ押して行

けばよいのだから問題は可なり簡單になる。然らばこの致命點はどうしたら表面に浮き上つて來る見込があるだらうか。そこで今回の戰爭の將來の推移を考へなければならない。

蔣政權といふものは誰もが考へるやうに、强力な武力の把握と、壓倒的な財力と、强烈なナショナリズムの上に立つ。この三つのエレメントを確りと把握して、國內のあらゆる諸機構の力をレンズの焦點に集中して、强烈な遂行力を造り出してゐるのが蔣政權と見ていいのである。この焦點に集中し得る力が蔣介石の獨裁力の根源になるのである。この根源は、鐵の强制力だと見てよろしい。宛もスターリンが一種特別なる實力機關のカラクリによつて、國內の隅々まで重壓を加へてゐると同樣に蔣介石の强制力も、蔣介石身邊の强烈なる實行機關のテロ的威力によるものである。具體的に言へば、軍事委員會第三廳であるのだ。目下の支那の最高指導機關は黨に非ずして、この軍事委員會にある。從つて、端的に言へば、支那には常に軍政が布かれてゐるので、蔣介石はその最高峯にある、平常已に斯うである。今日戰時狀態に這入つて蔣介石のこの力は更らに熾烈を極めて居ることと思ふ。

從つて蔣介石のこの把握力を一據にたたき落すまでは、蔣政權はなか〳〵倒れないといふことになるのである。

蔣介石のこの峻烈なる把握力は、またその倚つて立つものがあるのである。卽ち第一には、軍力、警察力であるが、この軍力をどれだけ叩いたならば、蔣介石は參るだらうか。蔣介石は今日、殆んど全力を擧げて日本と戰つて居るやうに見える。滿洲事變の當時と異なつて、今日の蔣介石には內敵なるものがない。內部に蔣介石の虛を突くやうな大勢力もなければ、國內の諸階級が可なり全體主義的に訓練されて居る。過去數年間、專ら日本を目標として準備されてきた。對日作戰については、思想的にも、軍事、經濟的にも準備されて來た。この準備に對する過信が蔣介石をして對日戰爭に起たしめた一つの原因であると思ふ。勿論蔣介石は、戰爭そのものでは日本に勝利を得るとは思はない。であるから蔣介石が對日戰爭によつて消費する軍力は限定的なものであらうと思ふ。この限定的な軍力によつて或る程度もち應へ、そのうちに四圍の情勢を利用して形勢の轉換を圖らうとする用意をもつてゐるのではあるまいかと思ふ。

蔣介石は全力を擧げて戰つてゐるやうに見えるけれども、今蔣介石が戰爭に直接使用してゐるものは、これだけを全く消滅しても、自己政權を保持するに一向差支へのない限度の軍力であらうと思ふ。背後には、敗戰後には內部的に自己政權保持のために必要なだけの軍力は、殘されて居るのではないかと思ふ、從つて當面して居るところの支那の軍力を叩きつけただけでは蔣介石の急所に觸れないのではあるまいか。只この軍力を木端微塵に叩きつけることによつて、支那上下の人心に及ぼす影響は甚大であると考へねばならぬ。この人心の動搖が蔣政權に對する懷疑となつて或は內部崩壞、卽ち蔣介石の統制力の破綻の絲口になる可能性が多分にあるといふことは言へるのである。

第二は、この事變の推移中において、蔣介石政權の倚つて立つてゐる浙江財閥の經濟活動にどれだけの痛打を與へ得るかといふことにあると思ふ。今日までのところ浙江財閥は今回の事變によつて夥多の外傷は受けて居るがまだまだ致命傷は受けて居ない。然し事變が長びけばこの外傷は當然致命傷に變つて行く性質のものである。南京政府が長期戰爭を豪語して居るけれ

ども、長期戰爭によつて墓穴を掘るものは却つて支那であつて日本でない。蔣介石の軍費は目下は種々の遣繰によつてまかなはれて居るやうだ。農民銀行の紙幣の增發、諸建設費の流用、行政費の節約、强制徵發、借欵元利の支拂にして延期し得るもの等の流用によるけれども、結局は公債の大增發の手段をとらざるを得ないやうになる。勿論浙江財閥は蔣介石と一蓮托生の關係にあるが故に、自らを亡ぼすことは知りながらも軍費の調達に無理をしなくてはなるまい。さうすると紙幣の濫發となり惡性のインフレになる可能性が充分にある。勿論蔣介石が日本軍と戰つて連戰連勝の宣傳が利いて居る間は何ともなからうけれども、一度び實體が暴露して敗戰の事實が全國民に明かになれば、必らず支那の現在の幣制に致命的動搖が來るのである。蔣介石が今日あらゆる機關を動員して『連戰連勝中國軍隊の威力』を宣傳してゐるのはこのためである。また、上海附近において日本の兵力が整はざるに乘じてガムシヤラに大兵を集中し、積極的攻擊に出たのは、緖戰において大いに戰つて、實力を誇張して今後の國內の諸情勢を有利に展開せんとする用意であるのだ。浙江財閥に對する戰費の問題、南京政府に對する國民の

信用を得んとする反間苦肉の術策とも考へられるのである。支那の幣制は、浙江財閥の金融中樞と政府との强力な協力を中軸として、蔣介石の獨裁機構の根底をなす暗黑實力機關の强制力をバックとし、それに英國のサポート、南京政府自體の信用を外廓として運轉してゐる。その一つが痛打されても幣制は紊れるのである。蔣介石が恐れてゐるのは敗戰による南京政府自體の信用の墜落であらうと思ふ。今回の事變の推移によつて支那の財政、經濟の機構がどれ程痛打を受けるか、これによつて蔣政權が倒壞するか、否かが定まるのである。

右に述べたやうに蔣介石の致命點は、今日に於てはまだ表面化したとは云ひ得ない。このまま推移して行けば當然出てくるには違ひないが、ことはさう簡單でない。日本で考へるやうな致命點と思はれることでも、南京においては對日戰爭の場合、豫定してゐる程度のことである場合も多い。ほんとうに彼等が困つたと考へざるを得ない狀態はもつとさきの事である。これは支那の日本とは違ふ點であり、久しきに亙る雜草的性格の强みである。日本軍事行動の統一的續行の持續のみが、南京のウイークポイントを押して行くかぎり、支那が、どうにもならな

い弱味を出すことは勿論である。即ち少くとも上海附近、または隴海線附近の蔣介石の軍力に殲滅的打擊を與へるか、或は浙江財閥の活動力の本身に痛打を加へれば、この致命點は外表に浮び出て來るであらう。この致命點を日本が突けば、蔣政權は急速に崩壞するであらう。

然しまた問題は蔣介石がこの致命點を衝かれる迄のろ〳〵として居るかといふことである。蔣介石天下を握つて十二年、今度くらゐ危い綱渡りをして居るのを見たことはない。間違へば轉落、蔣政權の崩壞となるのだ。常識で考へれば、蔣介石は、日本の武力と正面衝突して勝味はない。徹底的な敗戰をすれば蔣政權は轉落する。この位のことは蔣介石も心得て居るであらう。然るに日本に對し堂々正面戰の氣慨を見せて居るのみならず全力を擧げて日本軍と抗爭してゐる蔣介石がデスペレイトになつて居るとも見られるのである。然し僕等は考へる、蔣介石はデスペレイトにならない男である。といふのは彼は世界一の現實政治家であるからである。從つて今回も、結局の政權轉落に至らずして何等かの形で喰止め得る自信の上に出發して居るのではあるまいか。三段構へ、四段構への仕組みがしてあるのではあるまいか。過去の蔣介石

のやり方はそうであつた。圖り知れない深謀と、正確に環境の變化を測定して、敏速に出路を求める果敢さが實は蔣政權をして今日あらしめた重な素因になつてゐるのである。外から見ると萬策盡き、大勢に引きずられて自暴自棄の戰に出でたが如き蔣介石の胸裏には、意外にも何かあるやうな氣がするのである。前途の見透しはちやんとついて居るのではあるまいか。

千兩役者

僕等は數年前の滿洲事變當時の蔣介石のやり方を想ひ起して一脈相通ずるものを發見するのである。當時僕等は南京に居た。當時既に一切の言論機關や、社會指導の諸組織は、蔣介石の手で强力に把握されて居た。新聞社などには黨部または軍政部からの軍人が這入り込んで確りと統制して居る時であつた。その言論機關や社會指導者達が、喧々囂々として南京政府に對して『對日卽時宣戰布告』の要求をやつたものであつた。輿論は、徹頭徹尾宣戰布告の要求であつた。これに踊つたのは全國の青年や學生であつた。諸國の學生が隊列を作つて、旗を樹て食糧を負ひ、鍋釜を背負ふて南京に集まつて來た。その數約八萬、南京の政府、黨部の諸役所

の庭に頑張つて露營し、晝は市內のデモンストレーションをやり、南京政府が對日宣戰布告するまでは南京を動かぬといひ、宣戰布告と同時に我等を戰場に赴かしめよと恐しい氣勢を擧げたものであつた。そのうち警察と衝突するやら南京は一時無警察狀態に陷つた。僕等は結局蔣介石は宣戰布告せざるを得まい、然らざれば下野以外にあるまいと考へたものであつた。この結論は、形式から言へば至極合理的であつた。何故ならば蔣介石自身が强固に把握してゐるところの言論機關や、社會指導者達が血路を擧げて宣戰布告を要求してゐる。勿論蔣介石の意圖によつて動いて居るといふことだけは間違がない。これを前提として考へれば、蔣介石に宣戰布告の決心があることは想像が出來る。それに全國宣戰布告の要望に燃えて居る。然らば蔣介石宣戰布告を敢行しやうではないか――此處までは正しい。然し蔣介石の意圖は別のところにあつた。ちやんと三段構への戰法で、目的はちやんと別のところにあつたのである。

或日蔣介石は宣戰熱に猛り狂ふた八萬の學生群を南京郊外の孝園の練兵場に集めた。そして僅々一時間にして、この宣戰布告の熱度を高めた支那の方向を變ぜしめて自己政權强化の推進

力に變壓し得たのである。彼は學生群に對して大演說をした、『日本に對して宣戰布告をして戰ふのはいと易い、然しその結果を考へる必要がある。支那は弱い、我等の準備はまだ整はない、直ちに日本の鐵蹄下に蹂躙されるであらう。これは眞の愛國政治家のとるべき途でない、眞の愛國者は一時の感情を壓へ他日を期して支那を强からしむるために最大の努力を爲すべきである。こゝ數年われに準備の時間を與へよ、蔣介石不肖と雖も、國を誤る樣なことはしない。支那は只軍備を擴大し、國力增進に向つて驀進するあるのみ』喊聲は一時に學生群の中に起つて學生は南京から四散した。と同時に全國の言論機關、社會指導家は一齊に日本と他日戰ふために軍備を擴張せよ、國內の整頓を急げ、國家の統一といふことを叫び出し、ヒステリツクな對日戰爭熱よりヒステリツクな軍備擴張、國內整頓、國力增進の氣勢に移つたのである。蔣介石の大芝居だつたと見ねばならない、その後の蔣介石政權强化のテンポは恐らく世界史上に比類がないであらう。千兩役者蔣介石といはねばならぬ、蔣介石はこんな男である。そこで再び眼を今日の蔣介石の上に移つす。

活路はどこか

蔣介石の出方とこれに對する日本の對處の態度で、事態は今日の如く深刻なものとなつた。日本も國を擧げて蔣政權に迫つてゐるし、蔣介石も自己政權を賭けて戰つて居る。このまま自然の推移にまかせて置けば結局は蔣政權の倒壞は免れない。蔣介石もこの危險を充分知つて居る、野球で云へば正しく蔣介石のピンチである。ここに投ぜられたのが蔣介石の最後の一投である。ストライクか、ボールか、僕はどうもストライクとなつて、この一投によつて蔣介石はピンチを免るるのではないかと思ふのである。蔣介石は寧ろ始めからこの最後の一投に自信をもつてゐたのではないかとさへ思ふのである。即ち上海租界全體に對して猛烈なる『重壓』を加へたことである。即ち今までは日支の抗爭を對岸の火災のやうに傍觀して居た列國に直接被害を及ぼして第三國の介入を誘ふ術策はまんまと成功しそうな形勢となつたのである。蔣介石北叟笑んで居るのではあるまいか。彼は前述せしごとく上海の外國を刺戟する諸種の手を打つて第三國介入誘發のための諸種の手段をとつた。かくて蔣介石の意圖する第三國の介入の空氣は一瞬にして沸きたたせられたのである。

今の蔣介石にとつては、何とかして列國の眼を日支戰爭に惹かねばならない。第三國の介入によつて活路を發見せねばならない。然るに今のままでは列國の傍觀的態度は變へられない。日本は直接列國の權益を犯さない、犯さないから列國の文句は出ない、日本に信賴する態度である。そこでこの狀勢を打破するためには寧ろ蔣介石自身が列國の權益、居留民に直接被害を及ぼして列國を刺戟して第三國介入の空氣を釀成するよりほかないのである。そこでとられたのが蔣介石の反間苦肉の最後の一投であるところの盲目的空爆であると僕は思ふ。

これに次で南京の外交部は列國に聲明した。

『支那は外部日本から壓迫を加へられてゐる間は自衛の爲めに自由行動をとる』この聲明をするとともに、大軍を上海附近に集中し、上海租界全部に重壓を加へ、このままに推移せしめれば、列國の權益や居留民も一しよくたにして戰禍に捲き込まれ、列國の在支權益は空に歸するやうになるぞと恫嚇的行動を現實にとり始めたのである。

列國の動搖に乘じて支那は國內、國外のあらゆる機關を動員して、『日本が戰爭をしかけて來

るから支那は自衛のために、斯うせなければならない破目になつてゐる』といふ表示と宣傳をしてゐるのである。列國の態度が戰爭の原因の是非善惡を問はず、目前の自己の權益、居留民に蔽ひかぶさつてゐる重壓を逃れたいばつかりに、上海租界の中立を企圖するやうになつてゐるのは、蔣介石にとつては思ふ壺にはまつて來たのだとせねばならない。

列國の動向は全く蔣介石の狙つた的にはまりつつあるのだ。そこで蔣介石としては目前全力を擧げて日本軍を叩き、日本の權益を壞し、死者狂ひに戰鬪する。形勢が惡くなれば、中立案に贊成して軍隊を停戰區域からサツサと撤退してしまへばそれでよいのである。これを追擊する日本に對しては世界の攻擊を浴せかけるやうにすればよいのである。

果して日本の陸軍が上海附近に上陸した。蔣介石は決戰の覺悟で、蔣介石の直系中の直系軍隊を集中しつつある。一方英國の中立案に對しては、

『國民政府は上海の日支兩國軍隊竝びに軍艦を撤收し且つ英米佛の國際軍隊をもつて共同租界における日本の權益を保護することを提唱せる英國案は日本政府が同樣受諾することを條件

として原則的に受諾する用意あり南京駐劄英國大使ヒューゲッセン氏に對しその旨通達した』と實に用意周到なるコンミュニケをロンドンに於いて發表してゐる。第三國の介入の空氣は今後益々濃厚になるだらうと思ふ。それがどれだけ日本を牽制するか知らないが、日本が益々世界から惡者扱ひにされるやうに支那はあらゆる奸策を弄するであらう。少くとも今日の蔣介石には、或る一定の時間日本の攻擊を喰ひ止め得れば、必ずや列國がしびれを切らして具體的干渉の手を延べて來るであらうといふ確心があるやうに見える。現に、英國と蔣介石との間には、裏面において何か一脈通ずるものがあるやうに見えるのである。この一脈相通ずるものが今後如何に進展し發展して行くか頗る注意せなければならない。

要するに蔣介石の活路としては如何にして前記の急所を露出しないか、卽ち政治、經濟、軍事機構の把握力を如何にして保つかといふことであり、また、列國の介入によつて日本を牽制して貰ふ以外にないといふことになるのである。この二つが出來なければ蔣政權は倒れる。

二、南京の戰時機構とその活動の將來

蔣介石の統制力

獨り相撲でないので、支那事變がどう進展して行くか今のところハツキリと豫斷を許されない。然し常識的な判斷からすれば、ニューヨーク・タイムスのアベント君が觀測して居るやうに、支那軍は兩三ケ月の間に日本軍によつて痛打を受けるだらうといふことは想像が出來る。少くとも、特殊な新事態が發生せぬ限り、蔣介石政權は或程度押しつめられることは間違ない。そこで、さうなると支那の內部の情勢はどうなつて行くかといふことである。

今日までの蔣介石は、實に强烈な內部統制力をもつて居た。政治、經濟、社會思想あらゆる方面に亙つて組織的な統制力機構が成熟してゐるのである。蔣政權成立して十二年、恐らく今日程峻烈な統制力を發揮して居ることはあるまい。然しこれが何時まで續くかといふことは疑問である。敗戰の事實が明瞭となるにつれて、この統制力に破綻の糸口が露出して來はしない

かといふことである。ここに蔣政權倒壞の危險がある。この統制力の破綻が何時頃、どういふ具合に表面化して來るか、その前に、蔣介石の統制力を直視する必要がある。

戰爭前までの南京政府の諸政治の組織を見ると隨所に合議制度の部面がある。委員制度によつて運用されて居るやうに見える。これは宛もソヴエト政府や黨機關が悉く委員制度になつて居りながら、實際の政治方向は只スターリンの胸三寸で切り廻されるやうに、南京政府內の委員會は蔣介石の獨裁をカモフラージし、蔣介石に追從して蔣介石獨裁力の支柱としての役割以外には絕對に許されないものであつた。實際は有つてもなくつても、本質に變りのない飾りものであつた。然して今回、戰爭狀態に入ると同時に、蔣介石はこのカモフラージさへ脫して、所謂戰時體制の名目のもとに、更らに統制强化の手段をとつて居る。

卽ち南京政府中に、强力なる軍事政府が出來てゐるのである。このメンバーが、レニンにとつてのポリツト・ビユーローのごとく、蔣介石にとつては戰時中の最高統制機關であるのだ。在來の行政機關の機能は著しく低下してあらゆる力はこの軍事機關に集中されたのである。

名を擧げて見ると、

張群（政治、外交）黃紹雄、錢昌照（軍事、作戰）宋子文（金融、財政）吳鼎昌（資源、經濟）陳公博（宣傳）陳立夫（訓練）となつてゐる。この六人が數多き南京政府の要人中で、蔣介石にとつて最も使ひ易く、且つ蔣介石に二心なく、また有能と見込まれて居たのであらう。

汪兆銘、孫科、于右任、何應欽、王寵惠、居正などの大物は姿を現さない。如何にこれ等の大物が表看板としてのみ使用され、實力を拔き去つてあるかといふことが、事態が斯うなつて來ると表面的事實として明白になつて來るのである。右の六人が、少くとも今日の蔣介石の中樞機關であり、最高のブレン・トラストであると僕は睨んで居る。

何處の獨裁者でもさうであるが、蔣介石もその例にもれず、自己周圍に大物の出現を極度に警戒するのである。實權や實力は、片かけと雖もこれ等の大物にもたすことを嫌ふのである。スターリンは次から次にと大物を斃して行つた。トロツキーを追ひ、ルイコフを追ひ、ジノヴイエフ、カーメネフ、スミルノフ、ブハーリン等の巨頭を倒し、更にトハチエフスキー、等の

元帥大將の大物を宛も虱を潰すごとく殺して居る。蔣介石は、スターリンの立つてゐる容觀情勢と異なる情勢の上に立つてゐた故もあるが、これ程露骨ではなかつた。三國誌的にスターリンと同じ目的を、今少し巧妙に達成してゐるのである。民族性の相違もあるだらうが、蔣介石はスターリン程慘酷に大物を殺さなかつた。その代り細心有效な方法をもつて、周圍の大物の實勢力を拔き去つて、只表看板として、自己周圍に並べて、國家統一の道具に使用して居たのである。蔣介石は、南京政府成立早々、斯く爲し得る實力的組織を作つたのである。この組織が蔣介石今日のごとき、强烈な統制力を樹立し得た根本の原因になるのである。この組織が十年の年月を經た今日、頗る强靱に成熟してゐるといふことを見逃してはならないのだ。

從つて南京政府內部の不統制といふことは、餘り問題にならないやうに僕は思ふ。南京政府を組成する要人群を見ると、何れも實力を持たない。軍力、警察力、言論機關、財力、憲兵、その他のいやしくも實力を持つ機關は悉く蔣介石の腹心の一味が握り、その大元はちやんと蔣介石が握つて居る。そこで蔣介石に對して如何に不平不滿があらうとも、これを具體的に表

現するに於いては間一髪を入れずして逮捕監禁生命の脅威が迫つて來るのである。此の點が立憲政治の機能や委員會の機能と雲泥に異なる點である。南京政府の委員會なるものが合議制の本來の機能を發揮し得ず、單に蔣介石の意圖に迎合、追從、せざるを得ぬやうになつてゐるのは、前記の蔣介石の特殊の力によつて統禦されてゐるからである。要するに南京政府の表面組織外に實力の焦點は存在し、それを蔣介石が握つてゐる。從つてこの焦點のあるところが、南京政府の政府中の政府であるのだ。前記の六人が、この焦點の周圍をとり卷いて居るのだと今日の場合見なければなるまい。

この焦點は何處にあるか、此處に到つて前記の六人中の一人である陳立夫が大寫しに現れて來るのである。

蔣介石の獨裁力の根源は、南京政府の政治家をコントロールして行く力の發生點だと見なければならない。必らずしも理論や、思想や、主張等の宙象的な勢力でなくてゲー・ペー・ウー的な特務實力機關でなくてはならない。此の特務實力機關が、今日南京政府中の政府と稱せら

れる軍事委員會の第三廳であるのだ。この軍事委員會こそ平時における軍政府であつて、蔣介石が委員長であり、一切の支那の最高政策は此處から生れ出るのである。南京政府の觸るることを許さない農民銀行を有し、巨額の紙幣を發行して政府の財政と獨立した巨額の資金を有する機關である。

その第三廳が、陳立夫を主班とした往年の國民黨組織部の實體をそのまま移し、藍衣社C・C・團を一丸とする機關である。今日蔣介石の獨裁力の實際の根源は實に第三廳にあると見るべきである。

蔣政權內部の情勢

蔣介石が今日のやうな危急な狀態に直面して居る際、南京政府の內部では、陳立夫があらゆる方面に、最も活躍して居るのではないかと想像される。在來の仕組から考へればさうでなくてはならないのである。果してさうであるやうである。南京政府の財政面にまで、陳立夫の顏が一枚入用になつて居るやうである。卽ち蔣介石は、上海事變の發生とともに五億元の救國

內國債の發行に着手した。宋子文が委員長になり、陳立夫が副委員長になつて居る。陳立夫が此の方面に出て來たことは、南京政府成立以來初めてのことである。財界に於ける宋子文の信用と陳立夫の威力が必要とされて居るのである。陳立夫に財政的手腕があらうとは想像が出來ないのである。蔣介石が、陳立夫を財政、政治、軍事の表面にまで使つて居るのは、事態が最早や、暴力、恐怖によつて統制を固めて行かねばならなくなつて居るからである。この陳立夫の握つてゐる實力組織が、何時まで續くかといふことは大きな問題である。

外から見ると、南京政府の內部には對日主戰派と自重派とあつて鎬を削つて居たやうに見えた。主戰派が勝利を占め、蔣介石は主戰派に引きづられて、遂に立つたといふ觀測もあるのである。蔣介石が內部の主張に引きづられるやうな脆弱な男であるならば、とうの昔に顚落して居た筈である。蔣介石を決意せしめたものは、國內外の客觀情勢であつて、一派一部の主張ではない。蔣介石といふ男は、世界一の現實政治家である、決して冒險をしない、周圍の情況に對して、可なり正確な認識を持つ、熟慮に熟慮を重ねて決斷するのである。從つて蔣介石が戰

ふことは、戰ふことに活路を發見したのだと僕等は見て居る。戰ふことが、直ちに蔣介石政權の倒壞であることが彼自身に明瞭であれば、彼は決して戰はなかつたであらうと思ふ。

戰ふことに活路があると確信すればこそ、彼は戰つたといふことになるのである。この彼の確信は誤つてゐたかも知れぬ。誤算に出發してゐたかも知れないけれども、少くとも出發點は『或程度まで日本と對等の戰ひが出來、そのうち敗戰しないうちに第二の段階に入つて、自己政權の權威を保持し得る』または『たとへ敗戰しても自己政權の倒壞を防ぎ得る』といふ何等かの確信があるのだと僕等は睨らんで居る。

前者は、第三國の介入、特に英國とロシアの介入に對する期待であり、後者は自己の獨裁力・統制力に對する確信であると思ふ。從つて蔣介石の今日の努力は、第三國の介入を招來する手段に一部分が割かれて居る。上海租界全體に對し重壓を加へる。列國の權益に刺戟を與へて、支那事變を傍觀することが出來ないやうに仕向けて行く、特に英國に對しては裏面において幾多の好條件を提出して氣を引いて居るのである。英國の兩三年來の對支政策の根底が、蔣政權

の强化を中心にして、その勢力の上に自己權益を確保するといふことにあつた。また蔣政權の强化によつて、日本を牽制するといふことにあつた。英國が結局に於いて傍觀が出來ないといふことを知つてゐるのである。またソヴエト、ロシアに對して不可侵條約を結んだり、好條件を與へて、軍事上の救援を受くることになつてゐるのはこの爲である。また、種々なる峻嚴な法令を次ぎ次ぎに公布して、恐怖政治によつて統制を固めて行きつつあるのは、敗戰後における自己政權の倒壞を防止せんとする準備であるとも考へられるのである。

何れにしても、蔣介石の內部統制のためのテロ手段は、今日ほど、露骨、强烈に働いて居る時代を知らないのである。從つてこの統制力に破綻が來ると大變であるが、過去十年間ジワジワと組織された前記の機構が、一寸やそつとの刺戟では、なかなか破れさうにも考へられない。

對日主戰論のグループを見ると、大體二種類に分類することが出來るやうに思ふ。一つは魂膽あつての强硬論者で、寧ろ蔣介石政權の異分子的存在である。これに屬するものは、馮玉祥、孫科、白崇禧、李宗仁、李烈鈞、于右任、戴天仇、程潛、唐生智などであるやうである。

此等の手輩の中には、表面は蔣介石と一蓮托生の形式をとつて居るけれども、相當の野心もあり、魂膽を藏する者がある。蔣介石にとつては寧ろ警戒を要する代物である。蔣介石がこれ等の異分子を悠然と包藏して居るのは、前にも行つたやうに、裏面においては强烈なテロ的勢力をもち、表面においては此等の手輩に實力を握らせない。自己の統制力の範圍内にフラ〳〵させて置くだけであるからである。然し萬一蔣介石の統制力に破綻が來た時に、蔣介石を喰ふものは結局これ等の異分子であると考へなければならない。從つて若し蔣介石の統制力に危險が迫つて來れば、第一に犧牲に上げられるのは此等の異分子であると見なければならない。馮玉祥、白崇禧、李宗仁等の暗殺が報道される時があるやも知れないのである。

第二のグループに屬するものは、自國の力を過信する手輩である。これには黨部の中堅と、軍部の中に多い。

陳誠、張治中、楊杰、顧祝同、劉峙、錢昌照、錢大鈞、愈飛鵬、その他軍官學校出身の上級、中級、下級幹部は、悉く蔣介石を推し戴いて對日一戰を試みようと逸つて居るのである。

一般民衆層に於いては、人民戰線派が魂膽は意外なところにあるけれども、主戰派であり、財界の一部、民衆の一部、政府内部の一部を除いたほか對日一戰の一色に塗りつぶされてゐるやうに見える。蔣介石は此の氣勢の上に乘つて、此の機會に乘じて、自己統制力を鐵の如く固めることが出來るのである。たとへ敗戰しても、つかむものはつかむ自信が蔣介石には十分にあるのではあるまいか。敗戰は支那上下の連帶責任となるのである。蔣介石だけを責むるわけには行かないといふ空氣を蔣介石は容易に造くることを得るのである。リアリストでありコンベンショナリストである蔣介石は易々として出路を作り得るのではあるまいか。

地方軍閥と共産勢力

蔣介石政權内部の情勢は大體右のやうであるが、此處で考へねばならないのは、『國内に實力を有する蔣介石の政敵があるかないか、また蔣政權の中に融合してゐない實勢力があるかないか』いふことである。これが可なり大きな問題であると思ふ。この點について一番先きに頭に浮かんで來るのは、廣西に地盤を有する李宗仁、白崇禧である。また山東の韓復榘、山西の閻

錫山、湖南の何健である、何健はそれ程でもないが、李、白、韓、閻はまだ蔣介石政權下に完全に消化されない地方軍閥的存在である。これ等はまだ自己の兵力をもち、地盤をもつてゐる。私兵といくらかの財力をもつて居る。蔣介石に對しいくらかの實際的抵抗力を有するのは、この四人以外にはないのである。

蔣介石が過去十年間血みどろにやつて來たのは、地方軍力の集團化を防ぐといふことであつた。軍隊は直接中央の手で確と把握するといふことであつた。その努力は酬いられて、前記の四軍閥を除いた部面では可なり成功してゐるのである。この意味で蔣介石の把握下にある中央軍は約百八十萬と概算されて居る。この把握力も必ずしも一樣ではないが、少くとも軍官學校卒業生をもつて師團長以下幹部の大部分を占め、近代裝備を急いだ所謂『整理師團』の二十三ケ師團は蔣介石の中央軍中の中央軍である。この軍隊の威力が金米糖の核の働きをなして、百八十萬の中央軍は蔣介石の統制下に服してゐるのである。この二十三ケ師を蔣介石は劉峙、顧祝同、陳誠の三將軍に管理させ、その上に何應欽を置き、過去十年軍官學校教務長として人材

の養成に當つた張治中を側面に置いて、水も漏らさぬ統制をして居るのである。この二十三ケ師團だけは、少くとも蔣介石と最後まで運命を共にする軍隊だと見て置いてよろしい。この周圍を所謂乙種師團、丙種師團がとりまいて尨大な中央軍を形成するのである。從つてこの二十三ケ師團が崩壞しなければ、蔣介石の軍事上の統制力もなか〳〵弱まらないといふ結論になるのである。

斯う見て來ると閻、白、李、韓も今日の情勢では蔣介石に面と向つて反對は出來ない。但し蔣介石の勢力が戰爭の推移につれて消耗するにつれて、これ等の地方勢力が反蔣派の土臺となり得るのである。これを足臺にして不平分子や異分子が糾合されて次期政權をねらうといふことはあり得るのである。但しやつぱり時勢は變つて居る。五年前、十年前に比してかかる運動が容易に行はれ得ない種々なる條件があるのである。寧ろ期待薄だとせねばならない。

第二に考へられるのは共產勢力である。南京政府が西安事變以來聯露容共的政策をとつて來たのは、種々の原因もあらうけれども、僕等が第一に考へるのは、蔣介石自身の『國民運動管

理力』に非常な自信があつたからだとして居る。蔣介石は南京政府部内においてさへも、いろいろな異分子を抱きかかへて居る。馮玉祥の如きは何時蔣の寢首をかかぬとも判らぬ男である。親露派、歐米派などいろ〳〵なグループの存在を許容してゐる。それはこれ等の活動の範圍を制限し得る實力をもち、どうにでも牛耳る力をもつてゐるからである。自信があるからである。これと同じく共産軍及び共産黨に對しても自信をもつてゐる。この自信は終局においてはとり返しのつかないものになるかも知れないけれども、今日の支那共産軍、共産黨のスローガンが抗日一點張りであり、行動もこのスローガンに忠實に沿ふて居り、蔣政權の倒壞を自分の目標として居ない。この活動を許容しても目前に於ては蔣介石の邪魔にならない。從つて共産軍、共産黨の活動が抗日一點張りである間はこれを蔣政權の抗日運動の一翼として包含してもすこしも危險でないばかりか、今日となつて共同戰線の援兵となるのである。また今日支那の國民運動は强烈なる抗日意識に統一されて居る。この抗日意識を土臺として支那の統一、支那の建設、あらゆる政治、經濟、社會の活動が救國のスローガンの下に統制されて居る。この

國民運動を管理するところの黨機關、行政權關、軍事機關の機能は可なり强靱に成長して居る。この滔々たる流れに皮しては如何なる運動も成長し得ない。共産黨の運動は結局この流れに沿ふて居る時にのみ、支那民衆に許容されるものであるとの自信をもつてゐるのである。若し共産黨、共産軍にして一歩埒外に出でんか、警察軍、軍力その他の機構を動員して一擧に彈壓し得ると蔣介石は思つて居る。この安心が、蔣介石が容共的態度をとつた一つの原因だと思ふ。

然し斯うして居る間に、共産軍及び共産黨の勢力はウンと增大するであらう。抱きかかへて居る間に急速に大きくなつて手に餘るといふことになりはしまいか。蔣介石が最後の土壇場において赤化の覺悟があれば別であるが、意外に早く獅子身中の蟲となる時が來るのではあるまいか。

斯く見て來ると、蔣政權の內部は可なり强靱に見える。であるけれども、脆弱面が表に現れるのはこれからである。上海附近の會戰に、日本軍によつて痛烈な打擊を受くるとすれば、どこか前記の統制力に破綻の絲口が現れるか判らないのである。さうすると地方軍閥も動くだ

らうし、内部の異分子不平分子も騒ぐだらう。共産黨の活動も複雜になるだらう。であるが只一つのことは言へる。即ち來るべき上海附近の會戰において、支那軍が殆んど殲滅的に叩かれない限りは蔣介石政權はなか〳〵倒れにくいといふことである。

三、支那はどうなる

蔣政權はどうなる

そこで、蔣政權はどうなるか、支那はどうなるかといふことは、日支の强弱の比較と、日本の方針を前提として想定されるのである。日本の押し方如何で蔣介石政權は

一、蔣介石の下野により、南京政府は殘存して行くか。

二、蔣介石と一蓮托生、今日の南京政府の全組成分子の崩壞となつて、別の政權が樹立されるか。

三、この別の政權が赤化政權となるか、または日本その他の列强と協調する政權であるか。

四、蔣介石が依然として南京政府の主となり殘存勢力をまとめて政權を維持して行くか。

五、今の南京政府そのままが赤化して共產政權を樹立するか。

大體この五ツの行方しかないやうである。どれが一番可能性があるかといふことは、今後の戰局の發展を見なければならないが、今日日本の用ひて居る兵力の壓力と、支那の抵抗力を基準にして考へると、結局（一）か（四）かであらう。（四）が最も可能性のあるやうに考へる。

なか〳〵蔣介石は倒れにくいといふことになるのである。或は（一）或は（五）となるかも知れないが、現在のやうな日本の押し方では、それまで壓しつめることが出來るかどうか。然し戰局の發展中に於いて、日本が更らに激怒して、有效適切な戰略をとるならば、（二）となり（三）となることも不可能ではないのである。そこで、現在即ち九月上旬の情勢を基礎にして、今後の發展を考へ『蔣政權の行方』、『支那はどうなるか』といふことを考へる。その前に、蔣政權の本體を檢討して見なければならない。この蔣政權の本體を知り、その動向、その周圍を算盤に入れて見なければ、その行き方はわからないのである。そこで、

一、蔣介石の統制力に破綻が來るかどうか、即ち蔣介石の獨裁力の根源が攪亂されて、獨裁組織が破壞されるかどうか。

二、蔣政權の實體ともいふべき、軍力、財力、警察力、憲兵組織、國民黨の國民運動管理力、等々が戰局の發展につれてどうなつて行くか。

三。南京政府內部の要人の勢力關係はどうなるか、反蔣運動が擴大强化して行く可能性があるかどうか。

四、抗日戰線の一翼として、蔣政權に參加を容認された共產黨、共產軍の勢力がどうなるか。

五、第三國の介入が如何やうに具體化するか。

といふことを具さに見ると、蔣政權の彷徨して行く行き先が略ぼわかるのではあるまいか。

蔣介石の行き方

これまでしば〳〵論述して來た如く蔣介石が過去十年間に、急速に國家統一運動に成功し、强固な中央集權の政權を樹立し、獨裁力を行使し得た理由は多々あるけれども、その一つとして見逃すことの出來ないのは、蔣介石が、レニンの用語をもつてすれば『支配的高地』(コマンデルナヤ・ヴイソータ)と稱するものを、自己の掌中にのみ把握して、いやしくも他人に分與しなかつたといふことにあると思ふ。

この支配的高地とは政治、經濟、社會、軍事の分野に於ていやしくも實力の中樞をなす機關、人的要素、組織を言ふのである。たとへば、憲兵組織、警察網、金融の中樞機關、黨組織、軍隊等の中心機關を指すのである。獨裁者がこの『支配的高地』を確りと把握して居る間は、獨裁者は決して崩壞しない。若し獨裁者にして、倒壞の危機ありとすれば、それはこれ等の支配的高地に對する把握が、弛んで來た時でなければならない。

蔣介石の獨裁的統制力の大骨をなすものは軍力である。蔣介石はこの軍力の一部をも決して他人の手に渡さない。常に自己の手中に確りと把握して居るのである。そのためには、彼の全精神と精力がかけられて居ると言つても差し支へないのである。自己軍力の把握には、他人をして一指も加へることが出來ないやうに仕組んでしまつた上に、この自己軍中に大將軍の出現

を許さない。過去十年間、彼は如何なる小内亂でも、親ら軍を率ゐて戰爭をして居る。凱旋將軍の名譽を決して他人に與へないのである。彼の信賴する部下である何應欽、劉峙、顧祝同、陳誠、張治中と雖も、決して大きな權限を與へない。軍中の權力は、絕對に蔣介石一人が握ることになつて居るのである。

また、過去十年間の努力によつて、一應完成された憲兵網の一元的强化、これが蔣介石の全國統一を强固ならしめ、內部統制を熾烈にしてゐる强靱なる筋骨であるが、これまた自己の掌中に握つてゐる。憲兵の一元化と同時に、全國警察、公安局網の一元化が完成し、これまた蔣介石が確りと握つてゐる。また國民政府の財政の基礎たる浙江財閥に對する支配力は、蔣一派の獨占的なものである。

今日國民運動を管理する黨組織は、表看板は汪兆銘を立ててゐるけれども、實權は蔣介石が握つて居る。言論機關は悉く蔣介石の把握下にある。南京政府の行政の最高命令は、蔣介石を委員長とする軍事委員會から出される實情になつて居る。

斯く見て來ると、いやしくも、統治の實力の所在は悉く蔣介石に占據されて餘すところがない。支配的高地は、悉く蔣介石が握つて、銃眼をかまへて武力、財力、思想、警察權等の實體的、精神的な武器を据ゑて睨みつけて居る形ではないか。南京政府の內部で、唯れが蔣政權に攻勢をとり得るであらうか、然もこれ等の支配的高地には、自己の腹臣中の腹臣を据ゑてあるのである。卽ち、憲兵司令に谷正倫、公安局の總元締に藍衣社の戴笠、黨組織の實權者に陳立夫、財政は義兄弟の宋子文、孔祥熙、言論機關の總元締には藍衣社の賀衷寒等、呼鈴一つ押せば、これ等腹臣の手輩は、最大の機能を發揮して、蔣介石の命令通りに動かねばならないやうな仕組みになつて居る。斯のごとく、實力の根源を悉く握つて居れば、たとへ馮玉祥、李宗仁、白崇禧のやうな獅子身中の蟲のやうに思はれる異分子を糾合したところで、蔣介石の統制力はビクともしないのである。

此の見地から、蔣介石の容共政策なるものも、一應檢討されねばならない。

十三年前廣東時代に、容共政策がとられた時には、共產黨の勢力は、直ちに國民黨に蔽ひか

ぶさつた。ヘゲモニーは共產黨員に握られたのである。といふのは、當時の國民黨そのものが組織において、財力において、兵力において、また思想に於いて幼稚、薄弱であつた。ソヴェト・ロシアを背後に控へた共產黨の積極的な活動に對しては、殆んど抵抗力をもたなかつたのである。今日は、これと非常に情勢を異にしてゐる。

卽ち、國民黨自體が强健に成長し、蔣政權の力が充實して來てゐる。蔣介石は上述した南京政府は、共產黨がヘゲモニーを握れるやうにはなつてゐないのである。蔣介石は上述した南京政府內部に、數多の異分子を包藏したと同樣の自信をもつて、共產黨の包容を許して居るのは明瞭のことである。今日南京政權の內部の統制は、上述した統制力をもつて引きしめることが出來る。國民運動は强烈なるナショナリズム一點張りである。南京の『國民運動管理力』は、種々の管理組織の成熟とともに强烈になつてゐる。

然らば、今日抗日一本を看板にして、蔣政權と協調せんとする共產軍及び共產黨を包容したところで、蔣介石は危險を感じない。寧ろ抗日の一翼として、これを使用することが蔣として

は賢明な途である。從つて、今回の容共政策は、蔣介石が一定の埒內において、共產黨及び共產軍を、十二分に牛耳り得る自信に發足せるもので、共產黨や、馮玉祥、孫科等のごとき聯露派の主張に押されて、已むなくとつた政策ではないであらう。蔣政權がそんな薄弱なものであるならば、とうの昔に沒落して居らねばならぬ筈だ。

此の意味で、今日蔣介石が國民政府內部の主戰派に引づられて、戰爭をして居ると觀測するのは當らない。蔣介石、汪兆銘を穩健派といひ、孫科、馮玉祥、白崇禧等を主戰派とし對立抗爭したかのごとき報道がある。恐らく勝手な想像であらう。蔣介石は大勢を見るには頗る敏である。心中戰爭の覺悟をして居たのは事實である。といふのは、北支事變が起ると、間一髮を容れずして、滬寧線（上海南京間）滬杭涌線（上海、杭州間）において、戰爭體勢をとつて居る。

上海附近で、大山事件が起つたのはずつと後で、その時分は上海一帶には、すでに一應陣地の構築が終つてゐた頃であつた。上海事變が起ると、實に敏速に大軍を集中して攻擊を始め

たのである。これが穩健自重派の遺口であらうか。日本では何故か蔣介石が自重派といふことになつてゐる。平常の場合でも、蔣介石は引づられて抗日をやつて居るやうに考へるものがある。大きな間違ひで、蔣介石の決心は、支那の國内の大勢と、戰爭の自信と、將來の目算が立つてつけられたもので、主戰派に引づられたり、共産系に引づられた戰爭ではないのである。

堅固なる獨裁網の組織

斯う見て來ると、南京政權の實力機關は、悉く蔣介石の手中にあり、他の要人には一切この實力を持たせてない。蔣介石だけがピストルをもち、青龍刀をもち、タンクをもち、巾着をもつてゐるのである。丸腰の要人は正面から双向はれない。その上、更らに蔣介石の獨裁力を峻烈無比にして居る組織をもつてゐるのである。それは何か。

スターリンは、赤軍の實力者と考へられたトハチエフスキーその他の將領を、宛も虱を潰すごとく簡單に片附けた。若し赤軍が十年前の支那に存在したやうな將領の私兵であつたならば、スターリンと雖も、トハチエフスキーをどうにも出來ない筈である。大總統の曹錕が、馮玉祥

の軍隊に監禁されたやうな事態が起るのである。それといふのも、赤軍の組織自體が一將軍の自由にならない組織をもつとともに、將軍そのものがスターリンのもつところの强力なる組織、即ちゲー・ペー・ウーの監視下にあつたからである。ソヴエトの要人が、十重二十重にゲー・ペー・ウーの監視網の中にあると同樣に、蔣介石にもこの組織が强力に成熟し來つて、蔣介石獨裁力の根本の力はこの組織の上にあるのである。

蔣介石の初期の獨裁力は蔣介石衞隊の威力と憲兵のタイアップした組織の上にあつた。中頃は所謂、藍衣社、C・C・團等の獨裁擁護の實行機關にあつた。現在は、この藍衣社、C・C・團を一丸とし、更らに組織化された軍事委員會第三廳にあるのである。第三廳は蔣介石の腹臣である陳立夫を廳長とし、戴笠、徐雲章のごとき藍衣社系の蔣介石の腹臣をもつて組織されて居る。往昔革命途上に於ける軍事政治部の權能を持ち、最高の祕密偵察機關とし、同時に國民黨、國民政府の最高政策審議機關としてゐる。

此處において決定された事項は、暗黑な威力を背景として、黨及び政府の行政機關に廻附さ

れるが故に、これに反對の態度はとれない。南京政府の政治が、合議體を主なる體制としながら、一絲亂れぬ統制が出來てゐるのはこの爲めである。第三廳の本性は、人命に對し、覆面的な絶對權力を持つ恐怖本部となつてゐるのである。宛もロシアのゲー・ペー・ウーの本部と同樣である。毎年二千萬元近かい機密費を使用し、特察員を軍隊、官廳、銀行、實業團體、社會團體、學校等に公然、または祕密に配置し、憲兵網、警察網を利用し、個人の行動に對しても監視の眼を注いで居る。從つて南京政府の要人は、蔣介石腹臣のものと雖も、この恐怖本部の監視が直接または間接に、また遠まきに、或はすぐ側に置かれてあるのであつて、宛も蜘蛛の巣のごとき强靱なる靱帶に包圍されて居ると見ていいのである。

從つて、馮玉祥や孫科や、その他共產系の異分子の活動範圍は、頗る限定的であるといふことになるのである。これが蔣介石の獨裁力の根源であつて、何應欽でも宋子文でも、陳誠でも、孔祥熙でも、悉くこの網の目に監視されて居るのである。蔣介石の統制力は右に述べたやうに、頗る峻烈であると見なければならない。この峻烈な統制力がある間は、蔣政權はなか〳〵

倒れないのである。然らば、目下行はれてゐる戰爭の推移によつて、この獨裁力の根源は、どれ程痛めつけられるであらうか。これが南京政府の行方を判斷するキイとなるのである。

蔣政權のキイを握る支那事變

蔣政權の乘つて居る土臺の一つは軍力である。この軍力はどうなつて居るか、中央軍百八十萬と稱して居るけれども蔣介石が最も賴つて居るのは二十三ケ師團であらう。これは陳誠の手で改編、改裝された軍隊で、支那では整理師團といつて居る。師團長は悉く軍官學校出身、幹部も軍官學校出身である。近代裝備の甲種師團である。これが蔣介石の直屬軍であり、この直屬軍が金米糖の核の働きをなして、蔣介石の軍力の統制といふものは行はれて居るのである。

この整理師團は、他の師團に對しお目付け役もする。戰爭の場合は、攻擊、防禦の中心になつたり、督戰隊になつたりする。何れにしても、この二十三ケ師團の直屬整理師團が羊群を追ふて監視する强力なる番犬のやうな役割をして居るのである。從つて、蔣介石の軍力の中心部は此處にあるのである。この軍隊がなければ、蔣介石の軍力は、著るしく低下し恐らく獨裁政

權を維持することは出來ないだらう。この二十三ケ師團に、航空兵力、機械化兵力を併用して居るが故に、蔣介石の雜軍に對する威力は壓倒的で、地方軍官を威服してしまつてゐるのである。

此の二十三ケ師團は、また蔣介石が頼むに足る軍隊である。今日蔣介石の大きな力は、軍官學校卒業生の集團である。過去十三年間蔣介石を中心人物として、二萬三千の卒業生は、精神的一體となつてゐるのである。この軍官學校卒業生が軍隊のみならず、公安局長、警察署長、憲兵、その他の政治、軍政、社會の各實力機構に這入り込んで、蔣介石の統制網の強力な筋金となつてゐるのである。

蔣介石はこの直屬軍と、航空兵力と、機械化兵器を一團として、これを中軸として百八十萬といふ尨大な兵力を支配して居ると見ていいのである。從つて、蔣介石の獨裁政權に大なる打擊を加へやうとすれば、この直屬軍を徹底的にたたかねばならないといふことになるのである。

上海附近に出動して居る支那軍は、胡宗南（第一師）黃維（第十一師）宗希濂（第三十六

師）揚步飛（第六十一師）桂永清（第七十八師）劉戡（第八十三師）王敬久（第八十七師）孫元良（第八十八師）夏楚中（第九十八師）の九ケ整理師團と第二十四、二十七、五十五、五十六、五十七、五十八、六十、六十七、八十五、百十二、百六十七の普通師團十一ケ師團から成つて居る。如何に蔣介石がこの戰線に、全力を擧げて居るかといふことが判かるのである。整理師團九つも竝べて居るから、これに對して殲滅的打擊が加へられれば、蔣介石の軍力は半減し、蔣政權崩壞の端緒を得ることになるであらう。

但し一考しなければならないのは、この上海戰線に使はれて居る整理師團が必らずしも全師團を擧げて持つて來てないといふことである。勿論上海戰線は、この整理師團を中心として配置してはあるが、これは前にも述べた蔣介石の布陣の特性たる整理師團をもつて、或は戰線の主動部落とし、督戰隊とし、監視隊として雜軍を引きづつて戰線を强化せんとする作用に使用してあるもので、前記整理師團の大半部分は原駐地に置いてあるのである。

從つて、前記胡宗南から夏楚中に至る九ケ師團からは、或は一旅團、或は一ケ聯隊と部分的

に引き拔いて、編成されて居るのである。上海において敗戰しても、自己の軍力を徹底的に失ひ、元も子もなくなるやうな山は、蔣介石は決して張らない。然し上海附近における徹底的敗戰は、南京政權の上下に、大なる衝擊を與へるであらう。今日、南京政權下の朝野を動かしてゐる主戰論の根底には『國力の自信』が横つてゐる。『日本に負けない』といふ狂信である。

この信念が根本から破碎されると、今日の如く張りつめた支那上下の人心は、極度に動搖するであらう。此處に政府內部の狀態に、今日のバランスを許さぬ事情が發生しはしないか。即ち、蔣介石の軍力が弱まり、財力が弱まり、憲兵、警察機構が弛んで來、國民黨の國民運動管理力が弱くなつて來れば、蔣介石の鐵の統制力に破綻が來ることになり、ことに始めて異分子、赤化分子、不平分子の活動は始められるのである、その時に大きな役割をするのは馮玉祥、李宗仁、白崇禧、孫科、朱德、毛澤東等であらうが、或はその前に蔣介石は先手を打つて、これ等異分子、不平分子、赤化分子の大掃蕩を行ふかも知れない。

南京政府の財力と行方

蔣介石の軍費が、果して何時まで續くかといふことも、大きな問題である。目下の軍費は昨年度の收入の殘餘によつて無擔保、不完全擔保の外債支拂停止、行政費のやり繰り、建設の中止等、內部のやり繰りのほか、在外正貨七億元が物を言ひ、また國內包藏の金銀の引上げに躍起となつて居り、また自家銀行紙幣の發行に特殊のからくりをやつてゐるので、何とかその日の間に合せて居るやうであるが、國民政府財政の基礎をなす關稅、鹽稅、統稅等の稅收が、大打擊を受けること必然であり、また、公債の唯一の消化對象である浙江財閥の活動が殆んど停止されて居る。また銀行のからくりもいつまでも續くわけもないから、當然財政の破綻は來なければならない。

然し何分にも、蔣介石の統制力が、今日の如く峻烈である間は、國內においては强制力そのものが物的保障準備に代り得るわけであるから、紙幣の發行は或程度まで出來るのではあるまいか。但しこれは、惡性インフレと紙一枚である。國民は抗日一點張りに狩り立てられ熱狂し

て居る。精神的一致があるから民衆の犧牲によつて、種々なる財政的補給の方法も行はれ得るわけである。南京政府の財政家にそれだけの手腕があるかどうかは知らないが、國内には相當の物資がある。この物資を無償ででも引上げ得るアトモスフィーアと實力とをもつてゐる。

ただ問題は武器、彈藥のストックをどれだけもつてゐるかといふことであるが、これも馬鹿には出來ない。過去三年間蔣介石は農民銀行のからくりにより、毎年一億五千萬元程度の武器彈藥の購入をして居るのである。從つて、日本としては浙江財閥もさることながら、支那の物資について著目しなければならない。物資の集散地及びその運輸系統に、大きな壓力を加へなければ、支那は一寸參らないといふことになるのである。

また蔣政權の行方を考ふるに、大きな問題となるのは、共産黨の勢力である。今日でこそ、蔣介石の上記の統制力が利いて居るから、共産黨は抗日戰線の一翼として蔣介石の抗日に參加してゐる。であるが支那の共産軍、共産黨の背後には、コミンテルンがあり、スターリン政權がある。今日ロシアは極東に於いて、日本を牽制するために利用されるものは何でも利用して

居る。日本の大陸進出に對し、馬蹄型の包圍陣形を作ることに血眼である。アムール河から外蒙、北支の外廓、蔣介石を連ねて、數千哩の抗日線を作つて居るのである。

スターリン側からすると、蔣介石が抗日であればこそ、過去十二年間一貫してとつてきた『蔣介石政權打倒、共産政權樹立』のモットウを捨てて蔣介石と協力して抗日戰線に參加してゐるのである。明かに蔣介石の抗日を利用して、自國の安全を圖らんとするものである。また蔣介石側から言へば、共産黨が支那に於ける共産政權樹立の野望を捨て、蔣介石自身の目標とする抗日に目標を變へたればこそ、共産黨の包容を許したのである。魂膽は各々異つてゐる。同床異夢と言はねばならぬ。共産黨は今日戰線に參加してゐる。參加しながら次第に勢力を擴大强化して行くことは間違なからう。レニンの戰術『ジョインド・アンド・ブレーク』で、初めはおとなしく參加の形式をとる。その間に勢力を擴大して、母體を破壞するといふ戰術である。

蔣介石は、今こそ自己の統制力に、安心して共産黨を抱きかかへた。抱へて居るうちに、抱

へた子供が急激に成長して蔣介石の手に餘つて蔣介石政權自體の崩壞とならないとも限らないのである。

次に戰局の發展中において考へられる大きな問題は、第三國の介入によつて、蔣政權はどうなるかといふことである。此の點については、英國とロシアの動向を最も注意せなければならない。ロシアは勿論、武器、彈藥、顧問の派遣等を餌として、此の際支那における活動の地盤を擴大するであらう。蔣介石は或程度ロシアの援助に賴らざるを得ない。出來るならばロシアの抗日戰參加を求むるであらう。勿論スターリンがおいそれと蔣介石の意圖に乘ることはないい。だが萬一、スターリンが日本と戰つてくれるなら、負けずに濟む位のことは考へてゐるのである。從つて蔣介石の出路としてはロシアが參戰するやうに仕向けて行くことである。

英國の過去數年間の對支政策は、蔣介石の中央集權を援助して、その勢力の上に自己商權の擴大を圖るといふことであつた。英國の對支輸出品が主として建設材料、生產資材である關係上、支那の政治的統一、經濟發展が貿易增大の前提となるのである。從つて蔣政權が崩壞することは英國は好まない。この間の消息を、蔣介石はよく飲み込んで居るのである。或は英國との間に或種の了解があるのではあるまいかと思はるる節もあるのである。

それはそれとして、支那軍の上海盲目爆擊、我國軍艦砲擊、外國汽船爆擊、上海租界全體に對する重壓は、第三國の介入を誘ふ支那一流の術策であると見なければならない。それによつて蔣介石は第三國の强力な介入によつて、自己政權の倒壞を免れんとしつつあるのである。この介入が如何なる程度に具體化するか、勿論その中心は英國であらうと思ふが、これによつて又蔣政權の行方は定まるのである。

要するに、蔣政權は、日本が餘程の覺悟と適切有効な手段をとらねば、易々とは倒れない。倒れれば、支那には共產政權と、既存のブルジョアジーを背景にする、アンチ・コンミューニズムの政權が併立することとならう。

第九章　蔣政權を倒せ

一、蔣政權打倒へ

今回の事變以後の支那の新聞雜誌を讀むと連戰連勝である。日本の飛行機を擊墜し、日本の軍艦を襲ひ、租界を混亂に陷れ長江筋租界を實力回收したと報じてゐる。支那は近代國家と戰つて未曾有の大勝利を獲たと自信滿々である。この誤れる信念に我等は最も注意しなくてはならない。上海事變では、支那は戰爭に負けたと思つて居ない。支那が受けた幾十倍かの損害を日本に與へ得たと思つて居る。一地方軍隊である十九路軍が單獨で日本の精鋭な陸軍を破り日本は增援、また增援で兵力を增したため、十九路軍は已むなく戰術上の退却をしたまでであると信じてゐる。この信念が上海事變後今日まで、どれ程日本に被害を及ぼしたことか。また

支那國内に於ては、この信念の上に統一工作が實に急速に進行し、國力の强化に驀進したのである。

從つて、今日當面の問題としては、支那のこの迷妄を徹底的に打破する實物教育をするといふことが唯一の目標とならねばならないのである。東洋不安の根源は、實にこの支那の迷妄にあるといつても過言ではないのである。

今日の蔣介石政權は、今迄も屢々論じたやうに、支那の强烈な『民族主義』の上に立つて居るのである。過去十年間の努力によつて支那に民族主義を打ち樹てたといふことが、蔣政權の今日ある重要なる因素である。民族主義樹立の根底をなしたものは、實に日本に對する敵愾心であつた。端的に言へば、日本に對する敵意こそ、支那民族主義の血であり、肉であり、骨格であるのである。

凡そ民族主義といふものは、單調な平地では起らない。波瀾を必要とするのである。國民に共通の被脅威感を與へねばならない。卽ち國民に敵を示さなければならないのである。近代國

家の完成は多くは外敵乃至は階級の敵が有る時であつた。統一者はこの敵を國民の前に露出して共通の被脅威感を與へ、國民思想の統一を圖るのである。民族主義の一つの形式は、國民共通の自衞感でもある。

蔣介石は十年前日本を敵に撰んだ。支那の民族を喚び起すにはこれ位都合のよい對照はなかつたのである。その爲に日支の間には、次から次へと事件が起つた。濟南事變、奉天事件、上海、北支事件と殆んど週期的に起つて居るのである。これ等の事變を回想して見ると、日本は結局實力を行使しなければならないところまで引きづられて居る。實力は行使したが相手は多く地方政權、軍閥であつた。痛打を與へられたものは、蔣介石の本體でなくて、蔣介石には邪魔になる勢力であつた。例へば上海の十九路軍でもさうである。從つて蔣介石はちよつとも痛痒を感じないのみならず、これを利用して益々『民族主義』の高揚に努め、自己獨裁政權の强化を圖つて來たのである。

今までの日本の出兵の目的及び行動を見ると、悉く居留民の保護、權益の確保といふこと

以外に何もなかつた。眞正直にこれを行つてゐたのである。現實の解決策は蔣政權に痛打を加へなければいけないといふことが判りながらも、日本は自己の正直さと國際關係と、日支親善の可能、蔣政權の反省等を期待した結果、斷乎として本體を突くといふ手段をとらなかつたのである。從つて禍根は常に殘されたのみならず、却つて增大するばかりであつた。蔣政權が倒れない間は、蔣政權の本質から言つて事件は次々と繰返され、犧牲は愈々大きくなつて來るといふ必然の勢にあるのである。今日現在の情況から言つても然りである。

そこで、今回の事件に對しても、實例を三省も四省もして方針を定めて驀進しなくてはいけないと思ふ。居留民の保護、停戰地區の確保といふやうな名目は國際間には通りはよい。日本の正義觀の表面をなでるには都合がよいが、一歩を進めて居留民や權益を危殆に陷れ停戰協定を破棄した本體に對して徹底的な芟除のメスを加へるといふことをなさなければ、東洋の安定は決してもたらされない。

目前の事態から言ふならば、蔣政權の打倒といふことは、好まぬ國があるかも知れない。特

に英國などはこと一、二年來の對支政策の眼目が、蔣政權の全支統一を援助するといふことであつた。といふのは、英國の對支輸出品は、多くは重工業品、即ち建設材料、或は生產資材であつて、支那が統一され建設され、輕工業が旺盛になることによつて英國の產業は利益するところが多いからである。從つて蔣政權の崩壞は英國にとつては好ましいものではない。また米、佛、獨、伊共に對支貿易の點から言へば一時の打擊は受けるであらう。しかし、蔣政權がある間は、常に東洋は不安である。一時の犧牲はあつても、この不安を解除するといふ大手術に對しては、了解しない筈はないのである。日本は無理押しに押してでも、東洋不安解除の大手術を行はねばならない。何となれば、東洋不安によつて最も大なる被害を受けつつあるものは日本であるからである。これに對しては、英、米、佛、伊、獨の發言權は頗る限定的でなくてはならない。

在來日本では、蔣介石政權との間に國交整調、日支關係の改善の可能性あることを信ずる風があつた。それは支那の抗日政策が一種の反撥的感情運動で、甚しきに至つては兩國民間に

誤解があるからであると考へ込んで居たやうである。從つて誤解を解き、感情を和げ、理義を正せば國交恢復の可能性があると論ぜられた。實は蔣介石の抗日政策は、前にもいつたやうにそんななまやさしいものではなかつたのである。その實際の證據が、今日までの事態の推移である。日本はすでに蔣政權との關係改善を斷念すべき秋である。ただ打倒一本槍で進むことが結局日支關係安定の第一歩であることを斷定せざるを得ない。

今日の國家と國家との關係は、歐洲の宮廷政治時代のやうに、一政治家の思ひつきや感情や道義心によつてその方針が左右されるものではない。國内に成熟したあらゆる機構の自然に有する傾向や、勢力の加減乘除によつて割出されて來るのである。蔣介石政權を前提として國交關係の整調を圖らうとすれば、先づ支那自體の有する國内的諸情勢を見なければならない。この十年間、蔣介石は日本に對する敵愾心を煽るといふことによつて民族主義を打ち立てた。その民族主義に乘つて政治經濟、社會の指導的な機構は急速に出來上りつつあつたのである。從つて、この機構のもつ特性は、民族主義の目標と合致してゐる。卽ち極端に國家主義的であ

り、排日的である。端的に言へば、日本を對象として國防態勢に統一されて居るのである。日本を對象としたが故に斯くも急速に態勢が整へられたといふことも出來るのである。而して支那ナショナリズムの滔々として流れて行く方向は、何といつても『滿洲の奪回』である。この目標が消滅せざる間は、ナショナリズムの方向は變らないといふことになるのである。變らない間は、日支間の現狀に對して常に攻勢である。北支の原狀回復、冀東解消等々と既存の狀態に對して働きかけて來るのである。たとへ、北支の原狀を回復し、冀東を解消したところで、この流れは停止しない。この流れに乘つてゐるといふことが、蔣介石の政治をして圓滑ならしめ且つ成功させる所以である。

若し日本で考へたやうに、蔣介石が反省して、國内諸機構のもつてゐる特性を無視し、ナショナリズムの流れを無視して、日本流の國交整調に應ぜんか、結局は蔣政權は十年前に逆轉して機構の立て直しを行ふか、ナショナリズムを彈壓して方向を變へしむるかするよりほかない。現在の獨裁政治は著しく迫力を缺き、政治の進行は鈍らざるを得ない。或は一歩進めて

蔣政權破綻の端緒を作ることになるであらう。そんな危險なことは蔣介石がいくら馬鹿でもしない。日本ではやりやうによれば、蔣介石はさうなると信じて居る者も居た。

また一方日本が有する國内の諸情勢を見ると、大陸に對しては大きな執着をもつてゐるのである。是非善惡は別論として、殆んど本能的な大陸發展の欲求をもつてゐる。大陸に有する現勢力より後退しようなどとは夢にも欲せぬのである。後退を强制されれば國民的爆發となつて反撥する。奉天事件、上海事件、今回の北支、上海兩事變はこの爆發である。蔣政權は殆んど本能的に日本のこの欲求を阻止し、且つ日本が現在有するものをも奪回せんとするのである。

日本の本能と蔣政權の本能とは正面衝突をしてゐるのである。中間的な妥協が、如何なる努力を拂ふとも無駄であるのは自明の理である。一方が倒れなければ東洋は常に不安であるといふのは此の點である。

右の本能論は、說明が粗雜で概念的であるが、要するに近代國家は國内に包藏する產業の狀態がどの程度になつてゐるか、その傾向、性格はどうであるか、例へば、日本の產業狀態は輕

工業を中心とした資本主義のどんな段階にあるか、原料はどういふ風にして求められ、販路はどうなつてゐるか、金融の狀態はどうなり、金融資本はどうなつてゐるか、國民の思想、軍部の動向、財界の動き、その他雜多のエレメントが綜合されて、日本の歷史、傳統の上に乘せられるところに、國家の本能が發見されるといふのである。中には相反相剋する勢力もあらうし、對立の形になつてゐるものもあるであらう。これを差引きしてバランスをとると、國家の向いてゐる本能的方向が發見されるのである。これは一政治家や、具眼の士や、言論機關などで引張れる性質のものではない。

日本は支那における經濟的活動を本能的に望んで居る。これを阻止されると、本能的衝動を起すのである。日本が軍事勢力、政治勢力、經濟力等あらゆるものを總動員して大陸に働きかけて居るのは、日本にとつては大陸において經濟的に發展するかせぬかといふことが、生命の問題に近い感じがするからである。この現實を日本も支那も確りと見つめなければならない。日本に於いて觀念的支那論をする人々には、支那人と同じやうに、日本の經濟活動が單純なる

經濟活動のみに非ずして、直ちに背後に政治勢力が附隨するが故にいけないといふことをいふ。是非善惡は別論として、さうしなくては經濟發展の出來ない客觀情勢が支那にも、日本にもあるのではないか。日本の國家の本能がさうさせるのである。宿命だといはねば仕方あるまい。この本能的な方向を確り知らねばならぬ。最近の例をとつて見れば、日本の政治家、新聞人、軍人、財界の一部に冀東解消論があつた。だが日本の國家はこれらの主張と逆に動いたのである。本能的欲求は冀東の解消どころではなかつたといふ證明になるのである。これはうまい飯を食ひ、餘裕をもつものが頭で作つた國策でしかなかつたのである。國家の本體は別な欲求をもつて居たといふことになるのである。

今日の情勢から見ると、蔣政權を倒さなければ、日本の本能的欲求は常に阻止されるといふことになると思ふ。さうすると、日本はその都度本能的爆發を繰返さなければならない。寔に不幸なことである。この不幸を繰返さぬ爲めには、日本は眞に『斷じて行へば鬼神も避く』の大勇猛心をもつて、蔣政權を倒すことよりほかにないのである。蔣政權を倒した後はどうなるか。勿論支那の一部に共產黨の跳梁を見るであらう。一部の赤化は免れないであらう。斯うなれば、日本にとつては王手飛車といふところである。赤化政權に對して、必らず反共政權が出來るに違ひない。この反共政權を今度こそ本氣に援助して、此處に始めて日支の提携の可能性が湧いて來るのである。

二、我對支武力發動の目的を達成せよ

蔣介石政權成立以來十年間の東洋は實に不安定であつた。これは支那それ自體の國力の變化、支那に對する列國の勢力の消長、支那の歐米依存等、種々の外形的な原因にあつたが、原因が單純にこれだけであるならば、不安は決して深刻でない筈である。深刻であつたのは、これ等の諸原因が悉く支那の『隣國日本を敵とする』といふ根本政策の上に乘つて居たからである。從つて東洋不安の解消は、論理的には頗る簡單であつた。卽ち支那をして排日政策をやめることさへ出來れば、東洋明朗化の第一歩を踏み出すことになるのである。だがこの論理

は、貧乏を解消することは實に簡單である。即ち、金さへ獲得すればよろしいといふのと一般で、如何にして金を得るかといふ現實、具體的問題が大事であるのだ。

在來日本は蔣政權に對して幾度か國交整調の働きかけをなしてきたのである。その度毎に失敗した。そして蔣政權はこれを利用して反日、抗日の氣勢を揚げて居た。といふのは、日本の欲する國交整調と支那の欲する國交整調とは、概念に於ては對蹠的に相違して居たからである。即ち日本は滿洲事變後の既成事實の上に現實的な新關係に入らんことを要望し、支那は既成事實を原狀に還元することをもつて先決として居る。これは日本の過去十數年間に得たる大陸における地位の總退却を意味し、日本の大陸發展の民族的要求を阻止せんとするものであつて、日本としては夢にも許容の出來る筋合のものではない。この支那の要求と日本の要望とは中間的妥協の出來る筋合のものでは全然なかつたのだ。ところが、日本の對支政策はこの中間的妥協が出來るかの如く思つて行はれたものが多かつた。これが大きな間違であつたのである。また日本に於ける支那論の大部分は日支の互讓妥協によつて日支整調が出來るやうに思つ

てゐたやうだ。蔣政權のキャラクター、支那の客觀的情勢、日本の國家的本能に向つて冷たき觀察の眼を下せば、互讓妥協が出來ないといふことは、算盤の上に彈き出されて來るのであつた。互讓妥協によつて國交整調を圖らねばならないといふところまでは、日本人上下の要望であることは判つてゐる。然るに、それが出來ない現實的諸條件があるとするならば、現實に即する別な手段がとられねばならない。東洋安定のためには、現實に即した手段がとられねばならなかつた筈である。

その現實的の手段を日本が已むを得ずして採らねばならなくなつたのが今度の事變であると思ふ。なぜ已むを得ずといふかといふと、日本は始めからこんな手段を好まなかつた。現地解決、不擴大方針といふのが政府にも、民間にもこびりついて離れなかつた。然し事態は、その日本の方針と逆行した。實際已むを得ず、日本は斷乎たる決心をとらざるを得なかつたのである。何故始め現地解決、不擴大方針が採られたかといへば、何か別な手段によつて日支關係の清算が出來るといふ夢のやうな考へがあつたからであつた。日本は已むを得ずして斷乎たる決

心をしたが、それが一番現實に卽する有效手段であつたのだ。日本が若し、東洋平和を眞劍に熱望するならば、當然、大勇猛心を振つて大乘的手段をとるべきであつたのである。この大乘的手段こそ武力に訴へても正義を押し通し、正義の基礎に立つところの東洋安定を押し樹てることである。從つて、今囘の日本の用兵の目的は晃々として明瞭である。卽ち『東洋安定』のため、在來からの不安の原因を一網打盡に擊破するといふ以外には何もない筈である。實に東洋平和のための聖戰であると言はねばならない。

東洋不安の原因は劈頭に書いたやうに、蔣政權がその擴大强化のためにとりつつある日本敵對の政策である。今日支那のあらゆる國家建設の政策の基礎は日本に對する敵意である。この敵意を利用して政策遂行の推進力として居るのである。建設、經濟、財政、內治、軍事等あらゆる國家の根本的政策は、悉く日本との抗爭を前提として組立てられてゐるのである。蔣介石の眞意が戰爭を目的とせずして、國家統一にありとしても、その過程において隣國に對する敵意の高揚を必要とすることは、結局、常に日本に對し挑戰して居るのと同然である。東洋に

安定が來よう筈はないのである。

かくのごとく蔣介石が日本を敵とすることによつて、國民思想の歸一を圖り、自己政權の確立の道具として居ることが東洋不安の根源であるが故に、當面の手段としては蔣政權の打倒が考へられるのである。若し蔣政權が途中に於て反省して、日本敵視の政策を放棄し、現實に卽した東洋安定の政策をとるならば、好んで蔣政權を打倒する必要もないが、現在の形式において蔣政權が急角度の方向轉換をする可能性は絕對にないと見ねばならない。

今囘日本の實力發動の眞目標は、前にもいつたやうに東洋不安の根源を芟除して、東洋平和の基礎を作るといふことにある。從つて領土の野心などと言ふことは夢にも考へられないのである。領土の野心があつて日本が行動を起すとするならば、それが却つて東洋不安の根源となるのである。皇軍の出動の目的はそんな野心的なものであり得よう筈はない。皇軍の目標は純乎として東洋不安の根源芟除の一直線である。而してこの不安芟除の實際手段は非常に廣範圍であつて、或は支那の或る地域を日本は領有せざるを得ないかも知れない。領土の野心は毛頭

ないけれど、支那の一定地域を把握しなければ東洋安定が確立しないといふことになれば、日本はさうせざるを得ないのである。東洋平和の大理想の確立のためには、どこまでも現實的手段がとられねばならない。大理想を遂行するためには、實際的手段が必要である。大理想を遂行する目標の下に行はるる現實手段は、それが外見、大理想と背反するやうであつても罪惡にはならない。從つて隣國の政權を倒すといふことは、これだけを切り放して考へれば大變なことであるけれども、目標が東洋平和の確立であり、不安の根源芟除にあるならば正義である。若し東洋平和確保のために必要とあらば、日本は領土を支那の土地に求めても少しも差支へない。惡いのは、領土擴張の野心をもつて他國に戰爭を仕かけることである。資本主義勃興時代における歐洲各國が實演した植民地獲得の行爲がいけないのだ。

一方皇軍出動の現地に眼を移すと、北においては保定、滄州の陷落によつて、戰局は著しく日本側に有利に展開しつつある。この敵の二大根據地、然も過去數ケ月に亘つて堅牢な防禦工事をほどこし、難攻不落と頼んでゐたところが、わが皇軍の僅に數日に亘る攻擊によつても

ろくも陷落したことは、北支のみならず全支那の軍隊に大なる影響を與へた。北支に於ては恐らく支那軍の建て直しは困難であらうと見られてゐる。また山東の韓復榘、山西の閻錫山、綏遠の傅作義等は皇軍の威力をまざ〳〵と見せつけられ、その態度は次第に消極的となり、戰はずして沒落の運命を辿りつつあるやうである。何れにしても北支における舊軍閥の沒落は時の問題となり、北支明朗化の曉鐘を聞くのも遠いことではあるまい。わが皇軍は保定、滄州の占領に氣をゆるめず、平漢線方面においては石家莊、河間方面の敵陣地に驀進、津浦線方面においては、滄州をこえて遠く山東省境方面に迫り、一部は河間方面に向つてゐる。また平綏方面においては平地泉を確保し更に綏遠城方面に進出しつつある。

これと同時に內部においては、北支明朗化の基礎的工作が著々と進められつつある模樣である。先づ治安の方面においては北平、天津、張家口、大同等の皇軍の把握下にある都市地方においては、國民政府の羈束を放れた善良なる市民が、自發的に地方治安維持會を組織し、日本側と協定して非常な成績を擧げてゐる。北支一帶より橫暴な國民政府の勢力を逐うて、ここに

明朗なる北支人の北支を造成し、北支人の熱望たる北支の自治實現の曙光を見たるものといふべきである。この治安維持會は今後も各地に發生し、やがて北支自治の母體となるであらう。過去における、月本及び滿洲國の北支に對する切なる希望は、同地が日滿支三國の緩衝地帶として、反滿抗日なき理想鄕たらしめんとするにあつた。同時に日滿支經濟合作の基礎たらしめんとするにあつたのであるが、蔣介石政權の北支政策が、常に日本及び滿洲國を排除することをもつて基調としたが故に、北支は寧ろ東洋不安の根源となつたのである。日本の理想とは凡そかけ離れた存在となつたのである。

從つて今回の事變における皇軍出動の眞目的が、東洋不安の根源を芟除し、暴戾なる支那軍隊を膺懲するにある以上、北支一帶より國民政府の軍隊、政治組織、經濟機關を一掃し、ことに日・滿・支三國間の理想地帶造成が可能なるやうな素地を作ることが緊要である。この意味において治安維持會の健全なる發達に對しては、日本は適切なる指導と援助を與ふべきである。多年國民政府の搾取下にあつた北支としては、この際自力によつて、一朝にして立ち直る

ことは甚だ困難であるに相違ない。それゆえに日本は北支に對して、積極的に援助指導の手をさし伸べなければならぬ。皇軍の努力によつて、北支一帶より暴戾なる南京政府の軍隊の排除は久しからずして完成するであらう。問題は實に、その後に來る北支建設に對する日本の積極的援助の力であらう。これは實に日本の全支政策の成否のかかるところであるから、國民上下、この點については十分の覺悟をなさねばならない。北支より東洋平和の禍源となつた抗日支那を一掃し親日支那を再建して日・滿・支合作の理想鄕たらしむるには、なほ幾多の難關があり、努力を必要とするであらう。國民上下が更に一致團結して、この難關を突破して明朗北支の建設に邁進することは、わが國民に課せられた新らしき使命であると、われらは信ずる。

動く北支

陸軍大臣杉山閣下推奨
參謀本部高橋中佐校閲　第二國民會編纂

四六判二八〇頁
定價一圓三〇錢
附錄・北支地圖

今や北支に於ける事態は、益々紛糾して、その前途逆賭し得ざるの狀況に立ち至つた。（中略）この重大時局に當り、擧國一致、不動の決意を以て國威を宣揚し、公正なる主張を貫徹するのは、帝國の一大方策であつて、又實に東洋永遠の平和を確立する所以の道である。本書は、今次事變を中心として諸般の消息に及び、北支の全貌を詳述して、殆ど餘すところがない。思ふに、刻下の情勢は、その推移如何によつては、遽に逆賭し難いものがあるけれども、本書によつて、皇軍の使命を知悉し、帝國の立場を理解する一助にもなることと信じ、敢て推奨する。（陸相推奨の辭の一節）

北支こそ、わが大陸政策の第一線であり、東洋平和確立の基線である。現下の時局に際し、北支を正しく認識することこそ、全國民に課された最大の責務である

東京市神田區小川町一丁目十番地
第二國民會出版部
振替東京一三八九五六番
電話神田(25)〔二六七九番〕〔四六七五番〕

蔣政權はどうなる

不許複製

昭和十二年十月十七日印刷
昭和十二年十月廿二日發行
〔定價一圓三十錢〕

著者　吉岡文六
東京市中野區高根町六番地

發行者　鈴木種次郎
東京市牛込區榎町七番地

印刷者　平野喜代松

發行所　東京市神田區小川町一丁目十番地
第二國民會出版部
振替東京一三八九五六番
電話神田(25)〔二六七九番〕〔四六七五番〕

（大日本印刷株式會社印刷）

最新刊

近代戰と國防

陸軍省つはもの編輯部 原嘉章著

人類の歴史は戰爭の歴史である。人智の發達に伴つて、戰爭の形態は愈〻複雜になりつつある。本書は戰爭の本質より說き起し、進んで近代戰の特質ともいふべき、思想戰、科學戰、經濟戰の如何なるものかを指摘し、更に國家總動員に於て、國民のとるべき道を示せる、全國民必讀の書。

戰爭とは何か——
本書によつて、その正しき意義を把握せよ

四六判三〇〇頁
定價 一・三〇
郵稅 一二錢

——目次抜萃——

戰爭とは
戰爭とは何ぞや
軍備は平和の楯
來るべき戰爭
世界大戰の教訓
國家總動員
精神動員
人員動員
產業動員
交通動員
金融動員
貿易動員
思想宣傳戰
機械戰
科學戰

東京市神田區小川町一丁目十番地
發行所 第二國民會出版部
振替東京一三八九六五番・電話神田二六七九・四七六五番

陸軍省囑託 大內俊著

列強兵隊氣質

列國軍隊を餘すところなく解剖せる好著

(最新刊)

四六判二二〇頁
寫眞アート刷二十四頁插入
定價 一・二〇 郵稅九錢

列强の軍隊を俎上に持ち來り、縱橫よりこれを觀察批判せるもので、著者獨特の輕妙なる文章と明敏な觀察は、讀者をして魅了せずには置かないものがある。

內容

アメリカの卷・イギリスの卷
ドイツの卷・フランスの卷
イタリーの卷・「ソ」聯の卷
各國銃後の女性と青少年運動
附錄・支那の兵隊

東京市神田區小川町一丁目十番地
發行所 第二國民會出版部
振替東京一三八九六五番・電話神田二六七九・四七六五番

陸軍歩兵少佐　武藤夜舟著　（最新刊）

北支戰線 陣中手記 文と繪

今次事變勃發するや、著者は、急遽北支の野に馳せ、炎熱百二十度のもとに活躍する我が將兵と共に、或は第一線に立ち、或は一枚のアンペラに野營の夢を結び、著者獨特の雄渾なる筆と、彩管によつて具さに正義の旗を進める皇軍の活躍を傳へたものである。

この一書こそ、銃後を護る國民への最大の贈物と確信する。

四六版布裝函入
原色版六葉
挿畫五〇餘頁
定價一・八〇

——目次拔萃——

盆踊りの一夜　蘆溝橋の奮戰
目下の陣　樟詰の水
敵彈下の一日　蠅の樣な支那兵
長辛店の追擊　北支人の心境
良鄕縣城　軍票
南苑の突擊　陣中朗詠
一木部隊の殲滅戰
故鄕への便り　その他
二十九軍の正體
廊坊の死守

東京市神田區小川町一丁目十番地
發行所　第二國民會出版部
振替東京一三八九五六番・電話神田二六七九・四六七五番

744
64

13年 3月 9日 99

新井
閲覧済

Y.1.30